平成１８年度丹波地域民俗芸能保存・継承支援事業

丹波(篠山市・丹波市)地域民俗芸能調査報告書
～丹波地域民俗芸能の現状と課題～

本郷の春日おどり（篠山市）

川阪船山（篠山市）

青垣翁三番叟（丹波市）

青田神楽舞（丹波市）
H18.11.18丹波市立上久下小学校に於いて

丹波県民局・（財）兵庫丹波の森協会
丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査委員会

は　じ　め　に

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置し、篠山市と丹波市からなる豊かな自然や田園景観が残された森の国です。

また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交ざり、まさに文化の十字路として独特な文化を育んできました。

近年の社会情勢の変化はこの豊かな丹波の姿を急速に変えるとともに、そこに住む人々の心にも大きな変化を与えてきました。

こうした急激な社会変化に直面した現在こそ、新しい時代に向けて、さらに人と自然と文化の調和した丹波の森づくりを進めていく必要があると考えております。

この丹波地域は、数多くの伝統芸能や伝統文化を育んできておりますし、特に、民俗芸能は地域社会で伝承してきた素晴らしい芸能であり、室町時代から江戸時代の各時代の芸能がまんべんなく継承されているのが特徴です。

平成１７年度、初の開催となった「民俗芸能祭 in たんば」（平成１７年１１月５日たんば田園交響ホール）では、多くの人々が民俗芸能を直接鑑賞することができ、反響も大きく、貴重な場となりました。しかしながら、関係団体から後継者不足などの課題提起もなされたところであります。

このような中で、丹波県民局と連携しながら、豊かな自然や文化を生かしたたんばの「魅力」づくりの一環として、丹波地域の民俗芸能、伝統文化を地域の文化資源として再評価し、保存・継承の機運を醸成するとともに、地域の活性化を図るため、民俗芸能保存・継承に対して平成１８年度から三ヶ年計画で支援を行っております。

この報告書が、丹波地域の民俗芸能の新たな振興・発展方策、地域の活性化に向けての丹波内外への積極的な情報発信、保存・継承に向けた支援や方策の一助になることを願っております。

終わりに、この事業のためにご協力いただきました自治会・保存会等の皆様、調査から報告書作成にご尽力いただきました丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査委員の皆様、そして各関係の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

平成１９年３月

（財）兵庫丹波の森協会　丹波の森公苑
公 苑 長　　中　瀬　　勲

《 目　　次 》

は じ め に

１　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ１

２　丹波地域における民俗芸能　篠山市／丹波市　・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ２

(1) 民俗芸能とは

(2) 指定の民俗芸能

３　丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査の概要と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ１４

４　丹波地域民俗芸能の現状と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ２２

５　資料編　・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ３１

お わ り に

１ 調査の概要

（１）事業名

丹波地域民俗芸能保存・継承支援事業

（２）調査目的

丹波（篠山市・丹波市）地域の伝統芸能・伝統文化（以下「伝統芸能等」という。）を地域の文化資源として再評価し、新たな振興・発展方策、地域の活性化に向けての丹波内外への積極的な情報発信、保存・継承に向けた支援方策等について検討を進めるための基礎資料を得る。

（３）調査対象

丹波地域の伝統芸能等を広く調査するため、民俗等生活文化を含めたものを調査対象とする。「伝統」と称するにふさわしいものとして、原則として概ね「５０年以上続いているもの」を対象とする。現時点では廃絶しているものでも、復活させる価値があると思われるものも対象とする。（伝統的に昔から伝えられていた行事：村をベース）

（４）調査方法

丹波地域内の全自治会を対象にアンケート（篠山市２６１自治会、丹波市２８９自治会）

（５）調査内容

①屋台・山（太鼓・太鼓山・曳き山・ダンジリ・屋台）など神幸行列を引き立てる風流調査

②盆踊り調査

③神社や寺院の祭りなどの際に演じられた芸能で用いられた道具調査

④神社の祭りや寺院の法会、あるいは特別な行事（雨乞いなど）に、踊りや舞い、演技など地域社会で伝承してきた芸能調査

（６）調査期間

８月９日～９月２１日

（７）調査回収率

回収率７０．１８％

（８）調査委員会の設置及び役割

上記の調査目的を達成するため、丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査委員会を設置する。

① 丹波地域の伝統芸能等について広く調査する。

② 伝承されている伝統芸能等の現状や課題を把握する。

③ 伝統芸能等の保存・継承に向けた現状やその支援方策等についての基礎資料を作成する。

以上の概要により、調査を行ってきた。特に今回の調査の重点として、屋台・山（太鼓・太鼓山・曳き山・ダンジリ・屋台）、盆踊りがどの地域にあるかなど明確にしていくことを考えた。地域社会で伝承してきた民俗的な踊りなどの舞いは、めずらしい芸能であるため認知されていたが、屋台・山は、従来、民俗芸能として認識されず、しかも多くあるということで調査はなされなかった。また、盆踊りについては、民俗芸能と認識されていたが、今現在、過去の演目が消えさるおそれがあるのではないか、という観点から丹波（篠山市・丹波市）地域民俗芸能支援活動調査を行った。

この調査で伝承されている民俗芸能等を丹波地域の文化資源として明らかにするとともに、その伝統文化を再評価し、保存・継承に向けた支援や方策等を検討していくことが伝承されている地域の活性化につながると考えている。

２　丹波地域における民俗芸能　篠山市／丹波市

（１）民俗芸能とは

民俗といえば、民間に伝承されてきた風俗、習慣をいう。私たちが日々の生活の中で行う、衣食住から年中行事、人の一生などがその対象になる。民俗芸能という言葉は、舞楽、能、狂言、歌舞伎、文楽、長唄など、洗練度の高いプロの芸能と異なり、地域社会で伝承されてきた民俗的な演劇、舞踊、音楽やそれに類する芸能をさす。

都市部よりも、農山漁村で伝承されてきたことから、「郷土芸能」、「地方芸能」、「民間芸能」ともよばれてきた。研究者の間で、呼称の統一ができていなかったが、昭和５２年に東京文化財研究所の「郷土芸能研究室」が「民俗芸能研究室」と変更になるなど、「民俗芸能」という呼称が学術的に定着している。

こうした、民間に伝えられた民俗芸能の多くは、村の祭礼や盆・正月など年中行事の中で神や仏に奉納されることが多い。丹波に伝承されてきた、民俗芸能もその多くは神に奉納する芸能として、祭礼行事の中で伝承されてきた。その多くは、各時代に流行し、民衆の支持を得た芸能が伝承されてきたものである。

たとえば、篠山市に残る田楽は、おそらく中世末から近世初頭に伝えられ、長い歴史の中で少しずつ変化をして、現在の形になったものであろう。もちろん、その最初はプロの芸能者から村の人たちが学び、自分たちが演じやすい芸能にして伝承してきたものと思われる。

その典型的な事例は、丹波地域に分布する獅子舞であろう。こうした獅子舞は、伊勢の大神楽（だいかぐら）の技術を学び、隣接する村々の交流と競争の中で今の形になったものである。丹波市に分布する三番叟は、中世に流行した能楽の翁舞の伝統を継承する。時代の経過の中で、江戸時代に流行した芸能の影響を受け、能楽とも歌舞伎ともいいがたい独特の芸能になっている。篠山市の池尻神社の人形狂言「神変応護桜（しんぺんおうごさくら）」は、人形や人形遣いは文楽との係りを持ちつつ、節は説教節（せっきょうぶし）、義太夫節（ぎだゆうぶし）、国太夫節（くにだゆうぶし）、謡曲など多様な節で語っている。今では、節の差異を聞き取ることは難しくなったが、最初に奉納された宝暦４年（１７５３）には、聞く者、見る者の心をときめかせる時代の先端をいく芸能であった。江戸時代中ごろの、農村文化の質の高さを今に伝える民俗芸能になっている。三番叟、人形狂言ともに京・上方で流行した芸能が地方に伝えられ、時代の中で変化を受け現在に伝承されてきたのである。いうならば、過去にプロから学び、村人により伝えられた芸能の現在の姿が、丹波地域に残る民俗芸能なのである。

こうした民俗芸能は、神に奉納される祭礼芸能であるとともに、村人も楽しめるものであることから、その伝承に村をあげて取り組み、演じる者もそれを誇りにしてきた。ところが、戦後の高度成長経済による急速な農業の機械化や神社信仰の衰退にともなう、神の地位の相対的な低下の中で、こうした芸能は一時衰退し、廃絶した村もある。近年、再びこうした民俗芸能に対する興味関心が増してきたが、それは過去への郷愁、地域づくりの一環としての意味づけが強くなっている。「心」の部分が欠落した民俗芸能が、神や仏という求心的なものを失う中で、果たして過去の村人が守り伝えた芸能と同質のものになりうるか、まったく新しい民俗芸能として伝承されて行くか、民俗芸能の将来は大きな岐路にさしかかっている。

このように、民俗芸能は、長い歴史の中で、廃絶の危機を乗り越えながら伝承されてきた。広い意味では伝統芸能の一つといえる。しかし、伝統芸能というと能楽、能狂言、歌舞伎、文楽、琉球舞踊など洗練度の高い舞台芸能をさすことが多い。

最後に、文化財という視野から民俗芸能を見ておきたい。国の文化財保護法は民俗文化財を有形民俗文化財と無形民俗文化財に分類している。有形民俗文化財は、民家や民具など国民の生活文化の特色を示す形ある物をさし、無形民俗文化財は年中行事や祭礼、民俗芸能など形として残りにくいものをさす。

こうした民俗文化財は、保存とともに公開が重視されており、広く地域の宝として多くの人に周知されることが大切なのである。特に、無形の民俗文化財は、物としての形がないため、その形態を次世代に伝えることが難しい。そこで、大切なことは記録の作成をすることである。そのために、国は指定のほかに、丹波市青垣町の「青垣の翁三番叟」のように、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財の選択をしているのである。こうして選択された無形民俗文化財は、国指定の文化財に次ぐものとして重視されている。国と同じように、県や市も同様に無形民俗文化財として民俗芸能を保存・公開を図るための条例を制定して民俗芸能の振興に努めている。

（２）丹波の民俗芸能

丹波地域に残る民俗芸能の中で、国・県、篠山市、丹波市の無形民俗文化財に指定されているものは別に紹介する。ここでは、丹波地域に残る民俗芸能を分類し、その特色を紹介したい。丹波地域に残る民俗芸能は次のように分類できよう。

①　神楽

神楽といえば、巫女神楽（みこかぐら）や湯立神楽（ゆだてかぐら）、神話に題材した出雲系神楽などがよく知られている。丹波地域には伊勢の大神楽系統の獅子神楽（獅子舞）しか分布していない。こうした獅子舞も、芸能的な所作を持つのは丹波市に限られ、篠山市の獅子舞は、寺内、川北、小坂、西吹、当野で伝承されているが、祭礼に各家を訪れ、悪魔祓いや釜戸祓いをする所が多い。寺内の大売（おおひるめ）神社の獅子舞は、特に定まった所作はなく、担当する村が独自な演出で獅子をまわしている。興味深いのは、当野で６月下旬の亥の日に行われるオトウの獅子舞である。このオトウは、チマキを神社に供えるので知られているが、当番の家で接待をしている途中、各戸を回った獅子が、当番の軒につるしたチマキを口にくわえて落とす所作を持っている。

丹波市では、山南町、氷上町、青垣町、市島町酒梨（さなせ）、春日町上三井庄に神楽、大神楽という名称の獅子舞がある。山南町には、市指定の青田神楽のほか、金屋、玉巻、太田、上滝、奥の神楽がそれぞれ演目を持っている。青田は指定の民俗芸能で述べるとして、太田は竜の舞、豆拾いの舞、地面の舞、笹の舞があり、大小の獅子と天狗が出る。玉巻は剣の舞、神楽舞があり、獅子、天狗の他、仮名手本忠臣蔵に題材を取った与市兵衛や定九郎が出る演目もある。金屋では、獅子と天狗が出、荒神祓い、悪魔祓い、笹の舞、七五三、今づり、竜の舞、鈴の舞、毬くわえ、地面が演じられる。奥では、昭和３２年から神楽をしており、鈴の舞、剣の舞が演じられている。

氷上町の西方神楽も剣の舞、幣舞、しんてい、おさん囃しを演じ、青垣町沢野の神楽も剣の舞、幣と鈴の舞、花の舞をする。同じく青垣町佐治の新町神楽は、悪魔祓い、神楽舞、修羅獅子、天狗の舞をするなど、山南町同様多くの演目を持っている。現在は行われていないが、青垣町市原では、２０年ほど前まで、獅子、天狗、お多福が出て、三番叟（さんばそう）、悪魔祓い、剣の舞などを演じる神楽があった。このように、丹波市の獅子舞は、獅子舞の基本的役割である、祓いの部分を伝えるだけではなく芸能的要素を強く持っている。

こうした丹波地区の獅子舞は、国指定重要無形民俗文化財に指定された、伊勢大神楽の影響を受けたものである。演目も、伊勢大神楽の持つ、四方の舞や鈴の舞、地舞などの「舞」を基本と

している。その中でも、山南町青田で演じられる背継は、伊勢大神楽の花魁道中にあたり、大神楽の持つ曲芸的な「放下芸(曲)」をよく残している。

② 田楽・田植え神事

田楽は、永長の大田楽のように、平安時代末期の京都で爆発的な流行を見る。中世に入ると曲芸的な要素、演劇的な要素を取り入れて芸能として確立していく。こうした田楽も室町時代の初期、猿楽(能楽)が京都で受け入れられると、地方の社寺で芸能活動を展開していくようになる。丹波地区の田楽も、中世の末期から近世初頭に宮座という祭祀組織のもとで村の祭りに受け入れられていったと考えられる。

丹波地区では、篠山市今田町木津住吉神社、今田町上小野原住吉神社に残っている。上小野原では「神舞」または「かえる踊り」と呼ばれている。田楽は、ビンザサラ、締太鼓のほか、篠笛などを楽器として、左右対称に並んだ踊り子が演じる。踊りは、踊り子全員で踊るものと、踊り子の一部が一人で扇を持って踊る「入り舞」で構成される。この入り舞を今田町木津では「扇の舞（トトイチ)」、今田町上小野原では「イズマイ」とよぶ。兵庫県下には、加東市上鴨川、三田市内、多可郡多可町中区中村などに田楽が伝承されている。篠山市の田楽は県下にも数少ない、中世芸能の様子を伝える貴重な文化財である。

田植え神事としては、篠山市藤坂に「お田植え神事」がある。神事は、神社本殿の木階を水田に見立てて、禰宜役の者が鋤ですき、馬鍬でならして、鍬で調える所作をしたあと、桂の葉を苗に見立てて田植えを行うものである。現在は、場所を拝殿に移して実施している。神事の中で、禰宜が「奥のたんぼ、下のたんぼ、百の穂だれに千の米、所繁盛、殿よかれ」ということばで囃す。「殿」という、領主を示す中世的な言葉が残されているのが興味深い。

このお田植え神事は、兵庫県の丹波地区では、唯一のものであり、兵庫県下でも類似のものは、姫路市の広峯神社、赤穂郡上郡町の高嶺神社、豊岡市の雷神社に残っているにすぎない。周辺地区では、京都府亀岡市犬甘野や大阪府豊能郡能勢町長谷にお田植え神事がある。

③ 風流

風流は、本来意匠をほどこした造り物を意味したが、豪華で雅な衣装を風流と呼ぶようになる。従って風流には、丹波地区の秋祭りに出る山車や太鼓御輿、地蔵盆や八朔などに日用品で造る造り物なども風流に含まれる。今回の調査では、特に山車や太鼓御輿、盆踊りを対象に選定した。こうした調査成果は、第３章で詳しく紹介したい。

なんといっても、風流を代表するのは丹波市に残る「シンポチ踊り」や「風流神踊り」など、小歌を音頭に踊る太鼓踊りであろう。春日町稲塚の風流神踊りは京都の浪人が伝え、氷上町谷村の新発意踊りは、室町時代の末期に僧兵が伝えたという伝承がある。こうした、風流踊りは室町時代の末期に京都で大流行し、地方にも伝わったと考えられている。その伝播者が浪人や僧侶であったのだろう。

特にシンポチは、新たに僧になった者の呼び方で、谷村で伝播者を僧としたのは、新発意という僧形の者が登場することによろう。丹波市のシンポチはいずれも、瓢箪を付けた杖を持つことから空也聖の念仏踊りとの関係をのべる説もある。太鼓を用いて、小歌を音頭に踊るところから風流太鼓踊りに分類できるが、衣装や踊りに風流らしさは残されていない。むしろ、僧形の若者(シンポチ)と子供(稚児)を風流ととらえることができないだろうか。

こうした風流太鼓踊りは、篠山市今田町今田、市原、釜屋などでも「雨乞い踊り」として踊られていたが、大正２年の大旱魃を最後に姿を消した。

今ひとつ、分類が難しいが篠山市本郷の「春日踊り」をここに上げておきたい。伊勢音頭で境内に練りこみ、床机の上で踊る。音頭は木遣節、深川節、鯉の滝のぼり、豊年踊り、しそに菊らぎなどがある。拍子木のあと口上があり、三味線、太鼓、笛で囃し、音頭が唄う。歌詞の中に、伊勢道中を歌うものがあり、御幣や扇を採り物にして舞うなど、京都府や奈良県に残るお蔭踊りと共通するものがある。成立は、江戸時代の中期以降、幕末までであろう。

氷上町成松や篠山市古市の地蔵盆、春日町野瀬や山南町若林、篠山市二之坪の熊野新宮神社の八朔祭り、藤坂、小原では大芋小学校の「おいもまつり」に「造り物」を出している。造り物は、日常生活で使用する器具を利用して動物や人物などを造るもので、菊人形などと同じ発想で考えるとよい。こうした、造り物は江戸時代末期の細工見世物の影響下に生まれた風流の一つといえる。こうした造り物は、丹波・但馬の山陰道沿いに分布している。篠山市大芋、二之坪、古市、丹波市青垣町佐治から朝来市和田山町和田山、養父市八鹿町八鹿を経て山陰地方に続いてゆく。

最後に練りの風流ともいえる、丹波市氷上町中野、市島町中竹田一宮神社に奉納される「奴ふり」についてのべておく。いうまでもなく、奴ふりは大名行列に伴い１７世紀半ば過ぎ確立したといわれる。大名だけではなく、奉行、旗本、公家、寺社がその格式に従って外出時に挟箱や毛槍を持った供を従えていた。丹波市の奴ふりの歴史もよく分からないが、豊岡市出石町宵田（よいだ）の大名行列や京都府与謝郡与謝野町岩滝の大名行列が江戸末期から幕末に始まったとされている。神官や僧侶の格式に伴わない奴ふりは、江戸幕府の権威が低下する幕末以降に祭礼の風流として導入された可能性が強い。おそらく、江戸時代の終わりころ、神幸の先祓いと権威付けのために導入されたものであろう。

④　祝福芸

丹波地域の祝福芸としては、丹波市氷上町佐野、上新庄、稲畑、丹波市青垣町寺内、篠山市追入の「三番叟（さんばそう）」をあげることができる。三番叟は本来、能楽の最初に式三番といって、翁、千歳、三番叟を舞うが、その最後に舞う舞を意味する。現在、丹波市に残る三番叟は、能楽の式三番であるが、三番叟の剣先烏帽子や拍子に拍子木を用いるなど歌舞伎の影響を強く受けている。名称は、式三番の中でも揉みの段や鈴の段など見所の多い三番叟からとったと考えられる。丹波地域は、但馬の美方郡香美町香住区と並ぶ三番叟の分布地域である。その背景には、丹波市山南町和田を拠点に江戸時代に活動していた八子太夫（やつこたゆう）の影響があろう。

⑤　人形戯

人形戯については、篠山市宮ノ前の波々伯部神社の「お山の神事」、篠山市町ノ田の池尻神社の「人形狂言」がある。波々伯部（ほうかべ）神社の「お山」と「デコノボウ」という人形は、江戸時代に普及する山車や文楽人形とも異なっている。波々伯部神社の氏子地域が中世の祇園社（現八坂神社）の荘園、波々伯部保に相当していた。しかも、この神社は江戸時代まで祇園社とよばれ、波々伯部保の鎮守の役割を果たしていたと考えられる。このことから、中世に京都の祇園社から祭りの様式を導入し、現在のお山と謡曲で操るデコノボウが伝承されて来たと考えられる。

中世の面影をよく残す芸能である。池尻神社の人形狂言は、すでに述べたので省略したい。

⑥　寺院の芸能

正月の寺院の法会である修正会で演じられる「鬼追(おにお)い」「鬼の踊」「鬼会(おにえ)」とよばれる行事がある。奈良県や大分県にこの種の芸能が広く分布するが、その中でも群を抜いて多いのは兵庫県である。こうした鬼の芸能は、平安時代末期の京都の天台宗寺院で始まり、鎌倉時代には加東市社町平木の清水寺をはじめとして広く全国の寺院で行われていた。江戸時代には、篠山市今田町下小野原の和田寺で行われていたことが記録に残っている。

丹波地区では、丹波市山南町谷川の常勝寺の、「鬼こそ(追儺式(ついなしき))」という宗教的要素の強い芸能がそれに該当する。詳しくは、指定の民俗芸能を参考にしてほしいが、兵庫県下には類似する芸能が、神戸市西部から播磨地方の天台・真言宗寺院に広く残っている。谷川の鬼こそは、こうした鬼追いの北限に当たる。寺院を開いた法道仙人が、四鬼を鎮めるという独特の演出を持っているのも大きな特色である。

（３） 指定の民俗芸能

篠山市

① 池尻神社人形狂言（町ノ田池尻神社）

ある年、年老いた父母は一人娘を人身御供に出さなくてはならず、たいへん悲しんでいた。この話を聞き、お祈りをする青年武士の夢のお告げに、池尻大明神が現れて「宝剣一ふりを、智仁備えし勇者に与える」と言い残し消えた。おどろき飛び起きた青年武士の横には宝剣が置いてあった。お祭りの日、人身御供の行事もすみ村人が帰った後、草木の間から１０メートルもある大蛇が現れ、青年武士は池尻大明神から授かった宝剣で見事大蛇を退治した。その後、青年武士と娘は結婚し、村に住みつき子孫も村も栄えたと言い伝えられている。この様子を、人形狂言として演じたものである。昭和３５年１月１８日、旧丹南町（篠山市）無形文化財に指定される。

② 本郷春日おどり（本郷春日神社）

江戸時代の中期から末期の歴史と伝統が継承されており、京文化の影響を強く受けている。小学校中高学年の８人の子供たちが紺色の着物と襦袢に脚絆を付け、帯、手甲、赤色の前垂れ姿で踊る。持ち物は旗と御幣で、踊り子が神社の境内に敷いた床机の上で深々と頭を下げ、一礼するところから踊りは始まる。踊り子たちはしゃがんだり、手を打ったりして鮮やかな動作を見せ、「是が御仕上げか、お目出たい」と、奉納の終わりを告げる拍子木が打ち鳴らされると、すべて終了する。昔は「初庭おどり」「中庭おどり」「納めおどり」の三種類を踊っていたが、現在では一種類を奉納している。昭和５３年８月１日、旧西紀町（篠山市）無形文化財に指定される。

③　田楽おどり（今田町木津住吉神社）

毎年１０月第２月曜日の９月当に宮当とよばれる祭りが行われ、その前日の宵宮と当日の本宮の昼に神社の舞堂で奉納される。天明４（１７８４）年の宮当規式定書に「踊りならし」という記載が見られ、この時期には既に行われていた。田楽には幣かたげ、ササラ、太鼓、笛の役があり、使用する楽器は杉板５３枚のビンザサラ、直径４０㎝余りの締太鼓、神楽用の手鈴、手製の横笛である。踊り子は浅葱色の裃に仙台平の袴、白足袋の装束で踊り、笛の「ピーヒョロヒョロ」の合図でまず巫女の舞、そして全員の田楽、これが終わると跳（トートイチ）と呼ばれる舞の順番で奉納される。平成１５年３月２５日、兵庫県無形文化財に指定される。

④　蛙おどり（今田町上小野原住吉神社）

室町期頃から住吉神社の祭礼の宵宮に「田楽おどり」（通称蛙おどり）が伝承されてきている。もとは三つの宮座が主体となり奉納していたが、現在は保存会が行っている。集落では「神舞」と呼ばれているが、踊りの中で「カエロ、カエロ」というところや、動作が蛙の跳ぶところに似ていることから、一般的には「蛙おどり」と呼ばれ、神社もまた「蛙の宮」と呼ばれている。楽器は締太鼓、ビンザサラが使用され、踊りは惣田楽と「いずまい」と呼ばれる輪舞からなる。鶴亀を染め抜いた紺の素袍と袴を着用した踊り手が舞う２種類の単純な踊りであるが、中世の田楽の姿をよく留めている。平成１５年３月２５日、兵庫県無形文化財に指定される。

⑤　水無月祭打込囃子（川原住吉神社）

起源は天保年間、大坂の文楽座員であった遠山宗九郎満直翁が福住へ帰郷後、「常盤津」や「長唄」の粋を集め、当時６台あった各山車に打込囃子を作詞、作曲したのが始まりとされている。打込囃子は三味線・太鼓・小鼓・鼓弓等により、山車毎にそれぞれ違った囃子を奏で、古い伝統を伝えている。打込囃子は１５才頃から練習に取り組み、楽器一つを習得するのに３年程度の年数がかかるという。祭礼では氏子の各集落から出た山車が宮入りをすると、境内で打込囃子が競演される。この打込囃子の競演が住吉神社祭礼のみどころである。昭和５３年９月２日、旧篠山町（篠山市）無形文化財に指定される。

⑥　鱧祭（沢田八幡神社）

往古、付近にあった沼沢地を開拓した偉人の徳を称え、江戸中期頃から伝承されてきたと言われている。その沼地には大蛇が棲息し人々に危害を加えることから、何とか退治したいという農民の願いが込められているとされている。おとう(宮当番)に当たった家では、各々古式に則った珍味を用意して舞台を整え、大蛇になぞらえた鱧を引き出し実際に斬り付けて退治の真似事をする。周囲の諸役人は戸や障子を叩いたり滑稽な表情を作ったりして、この神事を大仰な所作で盛り上げる。前沢田、北沢田の両集落にあって、八幡神社の祭礼時に今ではそれぞれの公民館で行われている。昭和３３年８月１０日、旧篠山町（篠山市）無形文化財に指定される。

⑦　八朔祭の造り山（二之坪熊野新宮神社）

元は収穫された野菜を神前に供えていた風習が、延宝年間（１６７３～８１）頃から造り物に変わり、それを屋台に乗せて神社に引き入れるようになった。京都の祇園祭の山鉾を真似て宮入りするようになったとされる。この造り山は氏子である７つの集落がそれぞれ趣向を凝らして仕立てたもので、道中どんなに揺れても絶対に崩れたり落ちたりしないのが自慢となっている。造り山には囃子はないが、神前における各集落の老若男女総出の宮入りと、それぞれの趣向をこらした造り山がお灯明の電灯に映える姿は壮観。八朔祭の宵宮に行われ、祭礼の見所となっている。豊作を願う季節の風物詩である。昭和５３年９月２日、旧篠山町（篠山市）無形文化財に指定される。

⑧　波々伯部神社おやまの神事（宮ノ前波々伯部神社）

波々伯部神社の祇園祭に３年に１度奉納されるおやまの神事は室町期の発祥とされる。神事に使用される２台のおやまは胡瓜山といわれ、おやまの上で操られる１２体の人形は「でこのぼう」と呼ばれている。胡瓜山は社役人の指導で造られ、「でこのぼう」は宮年寄の世襲により代々受け継がれてきた。演目は「高砂」「道成寺」「愛宕山」「田原藤太」等が残り、宮年寄がおやまの上で胴串だけの単純な造りの人形を舞わす。「でこのぼう」が文楽、人形浄瑠璃に使用する人形の祖形と見られることや、謡曲が古式であることから、中世的色彩を留めた民俗芸能であり、祇園祭は市内三大祭の一つでもある。昭和５３年９月２日、旧篠山町（篠山市）無形文化財に指定される。昭和３８年９月３日、兵庫県有形文化財に、平成１７年２月２１日、国選択無形文化財に指定される。

丹波市

①　大新屋新法師踊り（柏原町大新屋新井神社）

「新法師」の語義から考えて、新しく仏門に入った僧達の踊りであるとも解され、雲水の伝えたものとも考えられる。歌詞の内容から考察して、室町時代の発祥ともいわれ、定かではないが、慶安年間（１６４８～１６５１）頃より伝わったともいわれている。

はじめは五穀豊穣を祈る踊りであったが、天保年間（１８３０～１８４３）雨乞い祈願を奉納してから雨乞い踊りといわれるようになった。またこれを奉納するのに米百石を要したことから百石踊りともいわれている。

墨染法衣・法師笠・瓢箪頭の杖を持つ新法師頭１名が指揮をとり、音頭取り・大太鼓打ち・鞨鼓打ちなどそれぞれ特色のある衣装をまとい、踊り子多数とともに踊る。

踊りは単調であるが、１６拍子・３２拍子などの拍子があり、入端・露の踊・菅笠踊など９種の踊りがある。昭和５３年１０月１８日、旧柏原町（丹波市）無形文化財に指定される。

②　南多田新発意踊り（柏原町南多田大歳神社）

「新発意」や「新法師」は共に仏門に入って間もない法師の意である。そうした人達が踊り伝えたのでこの名があるものと考えられる。こうした踊りは、室町時代の頃から、天下泰平・五穀豊穣を祈願して神社や寺に奉納したものであるといわれる。この地では、甚だしい旱魃にあい、農民の命がけの水乞いの時、旅の雲水からこの踊りを教えられ、以後、雨乞い踊りとなったともいわれている。

当地でも、安土桃山時代より、明治時代に至るまで、雨乞い行事として行われて来た。最近では大正６年（１９１７）の大旱魃に谷口音吉翁が保存に力を注ぎ、踊り復興の最盛期であった。昭和５３年１０月８日、旧柏原町（丹波市）無形文化財に指定される。

③　成松「造り物」の行事（氷上町成松愛宕神社）

成松「造り物」行事は、成松愛宕神社大祭の奉納行事である。

現在、成松区及び常楽区の一部で構成される保存会が結成され、計１１組に分かれて制作、競演されている。制作はお盆過ぎからはじまり、題材・材料とも各組秘密裡に進め２３日早朝までに仕上げる。

作風の特徴は、制作材料を祝儀物・金物・陶器

など日用品に求め、その内一種類一式を用いることで、材質の持つ色、つや、形等の持ち味を生かしている。また、その題材をその時々の時代・世相に求め、時代性及び風刺に富んだものとなっている。

歴史的には、元禄の頃、成松周辺で続いた飢饉や大火を憂えた有志が火難除けの神であるところの京都愛宕神社へ詣で、鎮火と五穀豊穣を祈願し、成松に分社を設けた。これを契機として、愛宕信仰が広まり、毎年の大祭の御供えとして奉納したものが造り物の形態に発展したものとされ、約２００年前に始まったと伝えられるが、定かではない。

現在知られる最も古い記録として、上町橘組による明治３５年７月調べの、「明治２４年（１８９１）以降３５年に至る愛宕例祭に付記録」が残されており、造り物奉納の記録があるが、その行事内容の詳細は不明である。

周辺では町内石生地区や青垣町佐治、篠山市古市などに同様の行事が知られるが、いずれも廃絶かそれに近い状態である。この意味においても成松「造り物」行事は貴重な文化遺産である。平成１２年９月１９日、旧氷上町（丹波市）無形文化財に指定される。

④　上新庄式三番叟（氷上町上新庄天満神社）

上新庄の天満神社の氏子（上新庄のうち、本庄・茶屋・南郷の３小字）に伝承され、天満神社の例祭の宵宮と翌日の本祭の朝、同神社の舞堂で奉納される。

三番叟を踏む演技者は３名で、もとはいずれも長男に限った。千歳（せんさい）は小学校１～２年生、翁（おきな）は青年が白面をつけて踏み、次に二番叟は中学生が演じ、途中で黒面をつけて黒式尉（くろきじょう）となる。

裏方は「大謡」数名・「鼓」２名・「笛」数名でいずれも青年、「小謡」は小学校１～２年生の少年、「かげうち」は青年１名が舞台の横にて拍子木を打つ。

順序は先ず千歳が侍烏帽子姿で演じ、ついで翁が白面をつけ、狩衣姿で踏み、ついで二番叟は少年が、かけ合いの後、同人が黒面をつけ鈴を持って黒式尉となって、三番叟となり、跳んだり、走って舞終わる。

天満神社で三番叟がいつ頃から始まったかは不明で、経過も明らかではないが、古い伝統を持つ神事芸能として保持継続されている。昭和５０年３月３１日、旧氷上町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑤　稲畑式三番叟（氷上町稲畑奴々伎神社）

稲畑の奴々伎（ぬぬぎ）神社の例祭の宵宮に奉納される三番叟で、いつ頃始まったかは明らかではない。現在は氏子である稲畑区全戸で保存会が組織され、毎年行われている。

千歳は小学校２年の少年、翁は青年、三番叟（黒式尉）は小学校６年生の少年が務める。裏方は鼓２人・笛２人・大謡２人をそれぞれ青年が務め、横で拍子をうつカゲウチも青年１人が務め、小謡も青年がする。

神事芸能で、翁は狩衣姿で白面をつけ、黒式尉は剣先烏帽子で黒面を着けて踏む。千歳は面をつけない。昭和４８年２月９日、旧氷上町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑥　谷村新発意おどり（氷上町谷村伊尼神社）

丹波市氷上町谷村字大森の元妙躰権現神社に伝わる踊りである。

総社伊尼（いちのみや）神社の例祭に奉納され、御輿渡御のお供をして、新郷・谷村の各お旅所でも踊る。道謡（みちうた）・屋敷おどり・具足おどり・車おどり・高田おどり等の種目があり、頭（かしら）１名踊り子十数名に、すげ笠袴姿の太鼓打ち３～４名、友禅の着物に手甲・袴のカンコ打ち数名、紋付袴の音頭取３名の役がある。

踊りは、先頭の赤鉢巻の頭とその後に並んだ踊り子が、豆しぼりの鉢巻に、友禅の着物（最近は紫色の衣装もある）に襷をかけて、右手にうちわ、左手に杖の先にヒョウタンを付けたものを持って踊る。

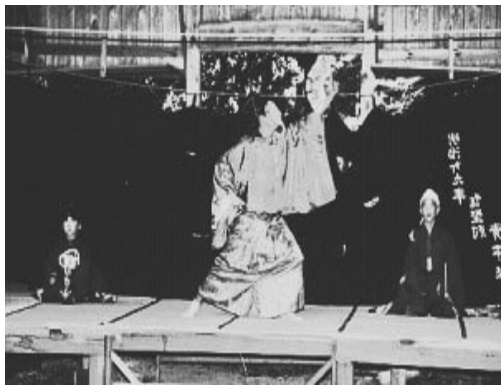
谷村でいつ頃から始まったかは明確にはわからないが、念仏踊りの変化した雨乞い踊りであったらしい。特に、旧氷上郡に数ヶ所伝えられているものの一つで、古い伝統と形式を持つ民俗芸能である。昭和４５年２月１７日、旧氷上町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑦　中野奴行列（氷上町三原内尾）

丹波市氷上町中野区民に伝承され、総社内尾神社の例祭に行われる神幸の露払（先導）の行事である。

ハッピ姿で、神社から御旅所までの間に、９回「奴振り」を行う。行列は二列で、挟み箱２人（中老）が先頭で、次に草履取（小学校）１人・槍持（中学生）２人・傘持（青年）２人・小鳥毛（壮年）２人・大鳥毛（壮年）２人の順で、別に警護２人がつく。出場者は早くより肉食を禁じ、当日は斎戒沐浴をしてつとめた。起源は明らかではないが、江戸時代の後期からであろう。昭和５４年７月２８日、旧氷上町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑧　佐野式三番叟（氷上町佐野矢降神社）



佐野式三番叟は従来矢降（やふり）神社の例祭に氏子が毎年奉納してきた。戦後一時中断していたが近年保存会を結成し、復興したものである。なお矢降神社は、『沼貫村誌』によるともとは高見山に祀られていたが、高見城落城に際し炎上し、鴨野・稲畑・佐野の山麓三ヶ部落に分祀し矢降神社と称したという。現在の社殿は昭和８年の建立である。

三番叟は、翁・千歳・三番叟（黒式尉と称している。）の三曲を演じ、囃し方・地謡・後見役等がある。演者

は、翁を青年が白色面をかけ、千歳は小学校２～４年生、三番叟は小学校５年～中学校１年生が当り、黒色面で鈴をもって踏む。囃し方（横笛数人・小鼓２人・拍子１人）・地謡（大謡２人・小謡２人）は青年が行う。その他面箱持ち１名がある。この三番叟がいつどこから伝えられたか全くわからない。ただ一つ記録的なものは明治２９年銘の幕があるのみである。稲畑の三番叟によく似ている。『沼貫村誌』には幕末か明治時代の初年に始まったのではないかとしている。昭和５９年３月２８日、旧氷上町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑨　青垣翁三番叟（青垣町沢野八幡神社）

室町時代末期頃、丹波・佐治郷の領主足立左衛門尉遠政の次男左衛門尉遠信が弘安２年（１２７９年）、字寺内・小和田集落に出城を築いた。その城山の麓に産土神八幡神社をまつり、村人たちが五穀豊穣、天下太平を祈願し神に奉納したのがこの芸能のはじまりと伝えられる。

三番叟の特徴は、千歳・翁・父尉・黒式尉の舞とも足の運び方にあやつり人形の所作が多くみられ、猿楽系統の舞での狂言風の問答語調といい、舞においても揉みの段、鈴の舞（種まき三番）に烏飛びの所作がみられることから、原形は能楽以前からあったのではないかと思われる。

「とうとうたらり、たらり、あがりららりとう」と、天台座主忠尋僧正の法華五部九巻書にかかわるとされる謡曲「神歌」の詞章と笛、小鼓、拍子木の囃子にあわせて、最初に踏むのは露払いの「千歳の舞」である。そして「面渡し」の儀があり、長寿を祈る「翁・白式尉の舞」、世継ぎの無事を願う「父尉の舞」、そして最後の踏舞として勤労を祈願する「黒式尉の舞」へと続く。「翁の舞」には「達拝」、「父尉の舞」には「烏飛び」という「反閇（へんばい）」、「黒式尉の舞」には「方かため」の古型を思わせる所作が色濃く残っており、徳川中期以後「あやつり人形」のもつ脚足の動きを古型の中に組み入れたものと思われる所作などにも特徴が見られる。昭和４５年３月３０日、兵庫県無形文化財に、昭和５３年１２月４日、国選択無形文化財に指定される。

⑩　裸祭（青垣町遠阪熊野神社）

熊野神社は「伊弉冉命」を祀るが、境内社のショウノ宮（若宮神社）は但馬国造の始祖とされる「大多牟坂王」と関係が深いと考えられている。昔は「遠坂明神」「多牟坂明神」と称し、旧遠阪村の遠阪・山垣・中佐治の三ヶ村をはじめ、神楽谷の四ヶ村・柴村（朝来郡山東町）の氏神であった。

祭礼には、それらの村々が立ち会って行い、かつては氏子の村から１５才になった男子１人ずつ１２人が、村を流れる今出川で身を清め、七五三縄を腰に張って素裸で神事を奉仕したという。現在では裸祭保存会が結成され伝承に努めている。

熊野神社は「命神」ともいわれ、丹波はもちろん但馬、播磨、摂津方面からも大病をしたり健康がすぐれない人がよく参拝していた。熊野神社のおかげで健康を回復すると、そのお礼として

三年間又は一生の間、例祭に神子をだす慣わしであった。本来は、神に稚児を奉納することが目的であり、その神事がミコトノリといわれていることから、神から何らかの託宣を得る目的があったのではないかと考えることができる。何度も肩を組んで旋回し、跳び上がる所作のなかに神懸りの痕跡を見ることもできる。

おまつりは、裸でヨイサ・オイサの掛け声勇ましく、本殿と舞堂の間を７回半駆け足で往復し、続いて、神宝奉還の神事の後を追って舞堂を３回めぐった後、御幣の奪いあいをし、身の守りとして持ち帰るのである。その起源は明らかではないが、江戸時代の地誌である「丹波志」に紹介されているところから、少なくとも近世から行われていたことがわかる。昭和４８年７月２６日、旧青垣町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑪　稲塚風流神踊（春日町稲塚御歳神社）

丹波市春日町稲塚につたわり、別名ザンザン踊りという。ザンザンとはやしながら太鼓を打つのでこの名がついたという。丹波地方に多い「新発意踊り」と同系のものである。もとは五穀豊穣・氏子安泰を願って氏神大歳神社の例祭に奉納していたが、現在は年ごとの奉納を中止し、慶事などに随時披露することにしている。

踊りは、音頭取り３人が裃をつけ、４人の踊り手が紺の紋付上着にだんだら染のえりをつけ、締め太鼓を持つ。２人の神子（かんこ）は踊り手と同じ装いに絵模様の前だれ、花笠をかぶり腰鼓をつける。新発意（しんぼち）（新法師）は４人で、踊り手と同じ装いで花笠をつけ唐うちわ・ささらを持って、これらが２列あるいは輪になって音頭に合わせて踊る。

曲目は道歌・願いの踊・雨乞踊・善悪踊・近江踊・祇園踊など１３曲あったが現在では８曲だけ踊る。風流神踊りの起源は、元禄時代に京都から浪人織部某がこの地へ来て大歳社の宮守をしていたとき村人に教えたのが始まりと伝承されている。昭和４４年８月３１日、旧春日町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑫　常勝寺追儺式　鬼こそ（山南町谷川常勝寺）

毎年２月１１日におこなわれるこの行事は、正式には「追儺式」と呼び、一般には「鬼こそ」と呼ばれている。かつて常勝寺が観音山中にあったころ、たびたび現れる化け物を退治するために法道仙人から教えられて始めたと伝えている。

鬼こそに重要な役目を果たす松明と、御供にする掛餅を縛るフジヅルなどは檀家の内、特定の家が代々準備にあたっている。

鬼こそは法道仙人役１人と鬼役４人で演じられ、仙人役は男児が羽織袴姿で御幣のついた杖をもち、鬼４人の内２人は松明と刀をそれぞれもつ「松明持」と「刀持」が赤の鬼面をつけ、柿色の筒袖の着物を着けて袴をはき、同色の足袋とワラジを履く。槍と錫杖をもつ「槍持」と「錫杖持」が青の鬼面で、緑色の同形の装束をつける。鬼は

装束の上から白晒でつくった「鬼のヒボ」と呼ばれる紐で、古式に則って規則的に体中に巻き付けていく。

鬼面については現在三代目で、初代の二面と二代目の五面（法道仙人含む）は市指定民俗文化財となっている。

その構成と芸態は、太鼓・法螺貝・銅鑼・鉦・鈴・木魚などが鳴らされる中、４人の鬼が仙人に率いられて、「餅切り」「火供え」「火合わせ」などの所作を行いながら堂内を巡っていく。最後に松明は参拝者に投げ与えられる。平成１６年２月６日、旧山南町（丹波市）無形文化財に指定される。

⑬　青田大歳神社奉納神楽舞（山南町青田大歳神社）

起源はさだかではではないが、享保年間（約２８０年前）には既に行われていた記録がある。「大歳神社」氏子の安寧と五穀豊穣を祈って毎年秋祭りに奉納している。

青田に伝わる神楽は、獅子頭を使ういわゆる伊勢大神楽系の獅子舞で、山南町では金屋・岩屋・上滝・奥・玉巻などに同様の獅子舞がつたわっている。青田の神楽舞は金屋から教えを受けたとの言い伝えが残る。

各地における大神楽系獅子舞の定着については、江戸中期以降、大神楽を受け入れる側の村の若い衆が自身の手で演じるようになっていき、それぞれに工夫を凝らして現在に受け継がれていったとされる。

青田神楽の囃子には太鼓・締め太鼓・横笛を使用する。獅子頭には必ず獅子の胴体にあたる布をもつ「ユタン（油単）モチ」１人が付き従う。舞うのは獅子のみの演目と、獅子と天狗が共に舞う演目があり、なかでも子供が台役の大人の肩の上にのっていくつもの所作を行う「背継ぎ」という曲芸的な演目が青田の神楽の大きな特色となっている。

演目は、①荒神祓（こうじんばら）い（獅子と天狗）・②四方（しほう）の舞（まい）（獅子と天狗）・③剣（つるぎ）の舞（獅子単独）・④地舞（じまい）（獅子単独）・⑤花獅子（はなししし）（獅子と天狗）・⑥鈴の舞（獅子単独）などが現在に残り、最後に⑦背継（せつ）ぎ（獅子と台役）という曲芸的な演目がある。平成３年１２月２４日、旧山南町（丹波市）無形文化財に指定される。

３　丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査の概要と考察

これまで、兵庫県内の民俗芸能に関する主たる報告は、文化財に指定されているものや、指定されていなかったとしても著名であったものに限られていたと言える。今回の調査では、そうした条件を勘案せず、篠山市・丹波市全域のすべての自治会に対しアンケート調査を実施していることから、これまで種々の報告でもあがってこなかったレベルでの実態が明らかになることが期待された。

なかでも、今回のアンケートで質問項目を細かく設定したのが、山車・屋台・御輿類の保有の有無と、盆踊りである。また、民俗芸能に関わる道具類、たとえば翁面・獅子頭・人形類・楽器についての項目を設けた。

アンケートの設問項目を設定する際に、できるだけ誤解なく簡潔に記入してもらえるように設

問項目に図示を入れるなどしたが、いくつかの回答には明らかに誤解や矛盾していると思われる記入や記入漏れがあった。そのため、未回答の自治会も含めて、新聞記事や既刊の資料などから補足できることは補足するとともに、事務局に写真撮影や電話確認等の労を執っていただいた。記して謝辞としたい。

この節では、アンケートの集計結果を分析しつつ、丹波における民俗芸能の特色が紹介できればと考えている。

（1）屋台・山車

山車・屋台・御輿類については、前節でも述べたように「風流」と呼ばれ、本来意匠を施した造り物を意味したものである。著名なものとしては、日本三大曳山祭りと称される京都祇園祭、岐阜県高山祭、滋賀県長浜曳山祭をはじめとして、埼玉県秩父夜祭、福岡県博多祇園山笠、福井県敦賀祭、滋賀県大津祭、愛媛県西条市西条祭など、その規模・豪華さなどいずれも甲乙がつけがたいものである。また、県内では姫路市総社の三山・一山神事と篠山市波々伯部神社の山は、いずれもその歴史が古く、多くの研究者たちが調査報告している。

波々伯部神社　胡瓜山

それぞれの祭りの中で登場するヤマ・ホコ・ダシ・ヤタイ・ダンジリなどと呼ばれる山車には、その地域の祭りを支えるひとびとの熱意が込められた装飾が凝らされている。それらは無限の形式に分類できるといっても過言ではないが、これまでの研究成果をもとに代表的な様式を簡単に紹介したい。

まず、柱を主体にした京都祇園祭の鉾、故事伝説や物語などの情景に趣向を凝らして造形した博多祇園山笠・敦賀祭踊りの曳き山、人形や人形からくりをともなう大津祭の曳き山、山や山上の社殿などの作り物が主体となる姫路の三山・一山神事の山や波々伯部神社の造り山、灯籠・行灯で造られる北陸・東北のネプタ・ネブタなどがある。また、囃子や所作事・音曲が中心となるものには、所作事などの芸能を演じる移動舞台となる長浜祭の曳き山、激しく鉦・太鼓などで囃しながら大人数で引き綱を曳く岸和田市の地車も有名である。

県内で言えば、いわゆる「播州屋台」と称される、姫路・高砂など豪華な屋根飾りを施した御輿型屋台、加西・高砂・西脇などのやはり豪華な飾りのついた布団屋根型屋台、三木・明石などの布団屋台の豪華さや勇壮さが著名である。摂津地域の尼崎・宝塚・西宮・芦屋・神戸市東灘区・灘区には岸和田型地車がある。その他豊岡市四所神社（旧城崎町）のダンジリをはじめとして朝来市・養父市などの但馬地域にも数多くの山車・屋台がある。

集計結果を分析するにあったて、アンケートの設問を簡単に紹介しておく。

○主要な質問

①　祭りの際に子どもや大人、造り物などをのせて曳いたり舁いだりする太鼓・太鼓山・ダンジリ・屋台と称するものはあるか

②－１　その名称

②－２　移動の方法　・曳く　・舁く

②－３　屋根の形

③　車輪の形
④　製作時期
⑤－１　囃子の有無
⑤－２　乗り込む人数
⑤－３　その名称
⑤－４　楽器の種類
⑤－５　歌・音頭
⑥　歌・音頭の名称
⑦－１　のせる造り物・人形等の有無
⑦－２　躍り・芝居の上演
⑧　その他

今回のアンケートを見たところ、回答のあった３８６地区と既刊資料類から確認できた１６地区、合わせて４０２地区のうち約４９％の１９８地区に屋台類があると判明した。中には、複数の屋台類を持っている地区もあり、総台数は２３４台を数える。ただし、この回答の中には、神霊をのせる神輿も含まれている。今回のアンケートでは、神体・神霊をのせて神幸する神輿は除外し、囃しなどを奏する子どもや大人、造り物などをのせる形態のものに限定している。また、大人たちが運行する屋台類を真似て子どもたちのために新たに作られた子ども御輿・子ども屋台なども除外している。こうした判断を下すには、本来であれば全地区に対して回答の確認をすべきところであるが、後述する名称や囃子方の有無等と合わせて勘案し、神輿・子どものためのものなど７５台を除外し、１５９台を検討の対象とする。

①　屋根の形　・御輿型　５台
・切妻型　８８台
・唐破風型　２９台
・唐破風二重型　なし
・布団型　２３台
・その他　屋根なし２台
・不詳　１２台

②　名称　・「みこし」・・・氏神御輿、大人神輿、おみこし　８台
・「太鼓」・・・太鼓、太鼓みこし、太鼓山、太鼓山車　６７台
内訳　太鼓　１４台
太鼓御輿　３１台
太鼓山　２０台
太鼓山車　１台
触れ太鼓　１台
・「やま」・・・曳き山、引き山、やま、鉾山、造り山　４２台
・「ふとん」・・・布団、布団みこし　７台
・「だんじり」・・・だんじり　２８台
・「だし」・・・山車　２台
・その他・・・　５台

②－２　移動の方法　・舁く　７９台

内訳　　丹波市域　　３８台
篠山市域　　４１台
・曳く　　８０台
内訳　　丹波市域　　１８台
篠山市域　　６２台

③　車輪の形　　未記入のものや、後付けか否か判断できないものが多く、集計には至らなかった。

④　製作年代

古いものでは、丹波市では氷上町石生新町のものに文久元年（１８６１）の墨書銘があり、山南町太田のものは嘉永元年（１８４８）以前に製作されたものと言われている。また、篠山市黒岡の春日神社の鉾山巡幸に登場する各町の鉾山に古いものが多い。春日神社の祭りは万治４年（１６６１）に始まったと伝える祭りで、上河原町の「三笠山」は寛文３年（１６６３）に寄進されたと伝え、下立町の「高砂山」は延宝２年（１６７４）、下河原町の「鳳凰山」は天保４年（１８３３）、上二階町の「猩々山」は貞享４年（１６８７）という。その他に上立町の「孔雀山」、呉服町の「剣鉾山」、下二階町の「閑鼓山」、魚屋町の「蘇鉄山」、西町の「鏡山」を含めて、享保年間（１７１６～３５）には９台の鉾山が揃っていたという。

春日神社　鉾山

その他、詳しい年代が不明ながら、丹波市では柏原町東奥の太鼓御輿、青垣町寺内のだんじり、篠山市では大渕のだんじり、畑井の船山、福住下の曳き山、下原山の曳き山、細工所の曳き山、川阪の船山などが江戸時代のものと伝えられている。

⑤　囃子の有無や乗り込む人数・名称、使用する楽器など

⑥　歌・音頭の名称

屋根の形･動かし方の形式に関わらず、１５９台中１１３台でなんらかの囃子が奏されている。山車の中には、４人から１５人ほどの乗り子とよばれる囃子方が乗り込み、太鼓・鉦・半鐘などを使って囃す。歌われる音頭は、おおむね伊勢音頭である。

名称・屋根の形式と使われる楽器の関係を見ると、太鼓・太鼓御輿と称されるものは、文字通り大太鼓を使用している。また、布団型屋根のものも大太鼓が主体である。切妻型屋根のものは、舁く形式のものは大太鼓が主体で、曳く形式のものは太鼓・鉦・半鐘など複数の楽器が使われているのが大半である。

楽器の中で特筆されるのが、篠山市川原の住吉神社の祭りで行なわれる打ち込み囃しで使われる胡弓・大鼓（おおどう）・三味線などである。

⑦　造り物・人形・躍り・芝居の上演の有無

前節にも紹介されているが、篠山市二之坪の熊野神社の八朔祭りで奉納される造り山は、熊野神社の氏子である二之坪、藤之木、箱谷、小野新、小野奥谷、栃梨、貝田の７集落で、出している。また、丹波市氷上町成松や篠山市藤坂・小原でも造り山が出されている。造り山は日常生活

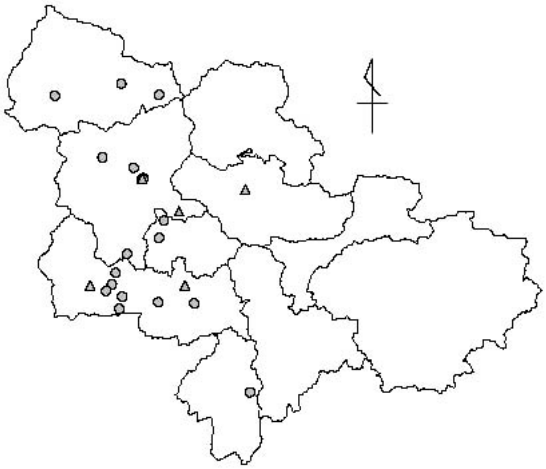
で使われる皿や碗などを使い、動物や人物などさまざまな題材の造り山を造るものである。

また、かつて丹波市柏原町新町では、だんじりの上を舞台として「義経千本桜」「太閤記」などの歌舞伎の名場面を演じていた。下町・上中町・本町・石田・古市場・新町の６町に各１台ずつあり、明治時代には各町内を巡行しつつ各所で演じていたという。新町では現在使われていないが、保管されている。

ここまでの項目については、屋根の形と動かし方の組み合わせを検討することで、県内の屋台類の分布と比較しつつ、丹波地域の特色を探ることを目的としている。

まず、県内の分布で特徴的なのは、いわゆる「播州屋台」と称される屋根が御輿型もしくは布団型で舁くタイプのもので、播磨地域を中心に数多く分布している。阪神間と神戸市東部の摂津地域には、二重唐破風型屋根で曳くタイプのものが分布している。さらに布団型屋根で舁くタイプのものについては瀬戸内一帯に広く分布し、とりわけ播磨のものは角飾りに豪華な房飾りがつき、四隅が大きく反り上がっている。一方、上部が平坦なタイプのものが、三木・三田に分布している。三田のものでは、かつて御輿型・唐破風型の屋根であったものを修理する際に軽量化を図って布団型に変えたものがいくつかある。こうした丹波周辺の分布状況と丹波における分布を照らし合わせてみると、丹波市域には播磨型の屋台類が主に分布し、篠山市域にはそれ以外のものが集中していることがわかる。（分布図１、分布図２）こうし

分布図１

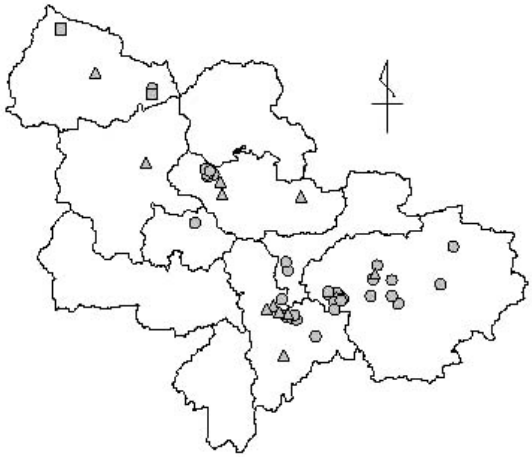


凡例　○ 布団屋根、△ 神輿屋根

御輿型屋根（山南町和田）

唐破風屋根（春日町小山町）

分布図２－１



凡例　○ 切妻屋根、△ 唐破風屋根、
□ その他の形式

た分布の偏りの要因について考えてみると、周辺地域との交通網との関連性が考えられる。

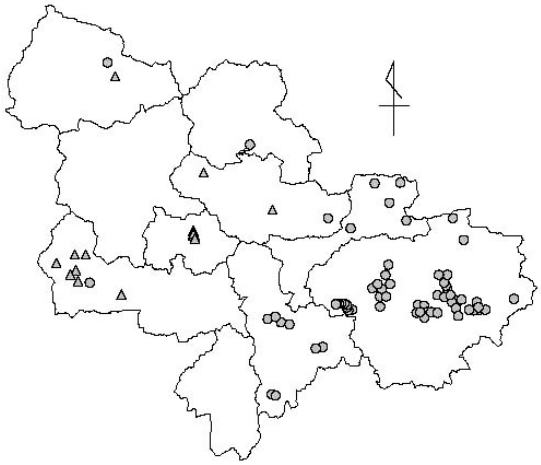
県内でも有数の河川交通が発達していた加古川の上流である佐治川には、慶長年間に田高村（西脇市黒田庄町）との間に航路が開かれ、丹波市本郷の本郷橋下に船着場があったと伝えられている。今回のアンケートの中でも、山南町太田にある太鼓台は四隅が反り上がった３段の布団型屋根の太鼓台で、明治４０年ごろに高砂市から中古の屋台を購入してきた際の記念写真が保存されており、嘉永年間以前の製作といわれている。氷上町石生新町の屋台は姫路市宇佐崎から買い入れたものであり、氷上町成松のものも姫路から、柏原町大新屋も姫路から、氷上町中央通りでも昭和３５年ごろ加西市北条から買い入れたという。こうしたことからも、丹波市域は播磨地域との密接なつながりを持っていることが理解できる。

一方篠山市域を流れる篠山川は、加古川上流とはいえ山南町内でかなりの渓流となり川舟の航行は不可能であった。代わりに東に接する京都方面との関わりが深く、そのことは篠山市の中心街に位置する春日神社の鉾山９台が京都祇園祭の鉾山と共通するものであることからも知ることができる。その流れとは反対に、篠山市内にあった鉾山が京都府の丹波地域に譲渡されている。丹波町辻の屋台は、元来篠山市市野々もので、丹波町中畑のものはかつて篠山市日置より譲られたもので、囃子も習ったと伝えている。（平成１０年度講座「丹波学」－丹波の民俗を知ろう－　原田三壽氏）

さらに、丹波地域の屋台類の特徴として、船型の山車が挙げられる。

まず、船型の山車は、屋根は切妻型、下部が船型に作られたもので、篠山市波々伯部神社の畑井と畑市、篠山市川原、川阪、今谷、瀬利の計６台がある。また、現在は休止しているのも、杙木のものも船形である。（分布図３）こうした船山には、いずれも８～１５人の乗り子が乗り込み、大太鼓・締太鼓・鉦・半鐘・横笛・三味

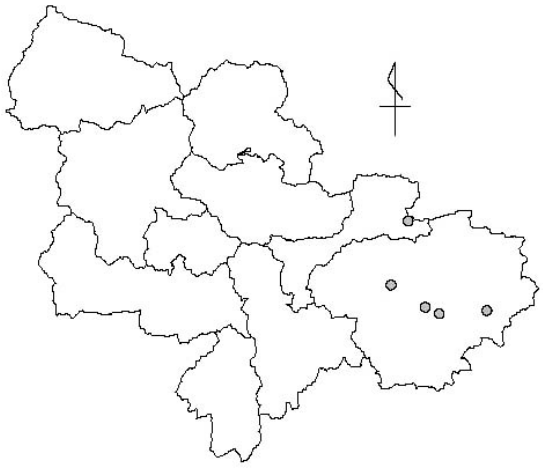
分布図２－２



凡例　○　鉾山（車輪御所車、屋根は主に切妻屋根）、△　その他

山南町太田（明治４０年ごろ）

分布図３　船山の分布



線など使用される楽器の種類も多く、にぎやかな曳行である。

中でも、篠山市川原のものは、７月最終日曜日の住吉神社の夏祭りで行なわれる打ち込み囃子で登場する。かつては６月３０・３１日の水無月祭りで行なわれた。川原の他、福住下・福住中・福住上・本明谷も同様に打ち込み囃しを奉納する。かつては杙木も「やま」と呼ぶ山車を持っていたが、昭和４５年に断絶したという。拝殿前に山車が集合したら、１台ずつが神前で「打ち込み囃子」を奉納する。宮入までの囃子は太鼓・笛・鉦を使って子どもたちが、打ち込みは若連中（青年たち）が行ない、三味線・太鼓・オオドウ（大鼓）・胡弓・笛を演奏し、「いやさか・・・」合いの手が入る。各地区の山にはそれぞれ名称があり、川原が「菊水山」、福住下が「亀甲山」、福住中が「獅子王山」、福住上が「鶴寿山」、本明谷が「鳳凰山」といわれ、地区ごとに提灯飾りなど工夫を凝らしている。

波々伯部神社の船山

住吉神社川原の船山

なお、今回のアンケート調査をきっかけとして祭りに再登場することになったのが、山南町若林の曳き山である。老朽化により５０年近く倉庫に保管されたままになっていたものが整備されたのである。前述したように播磨型の舁くタイプが主流の丹波市域にあっては珍しい形式で、土台部分に囃子方の子どもたちが入り、中には造り物を飾ったという。同様に造り物を山車の中に飾るのは篠山市二之坪・貝田・藤之木などの造り山で、毎年９月１日二之坪の熊野新宮神社の八朔祭りに登場するが、こちらは造り山の中に入って囃子を奏することはない。今後詳細な調査が望まれる。

山南町若林の曳き山

（２）盆踊り

丹波地域で盆踊りといえば、毎年８月１５日・１６日に行なわれるデカンショ祭りの情景を思い出す人が多いであろう。この祭りには、篠山の人びとだけでなく、周辺地域の踊り自慢たちも参加し、互いに踊りを競い合ったという。この全国的に有名になったデカンショ節は、明治１７年に創設された鳳鳴義塾（県立篠山鳳鳴高校の前身）の学生寮の寮歌が元になったという。さらに、その本歌が「みつ節」とされ、江戸時代中期にはすでに篠山地方に広まっていたと言われている。今回のアンケート集計によれば、デカンショ節を盆踊りの演目として踊っているのは、丹波市域では山南町太田をのぞいては他になく、すべて篠山市域に限られている。（分布図４）

デカンショ節のほか篠山市内で踊られている音頭の種類は、さえもん音頭・江州音頭・播州音頭・福知山音頭・黒井音頭など多岐にわたって踊られている。一方、丹波市域では、さえもん音頭がもっとも多く踊られ、ついで春日町黒井を本場とする黒井音頭がつづく。そのほか播州音頭・江州音頭・福知山音頭・三田音頭なども踊られている。

さえもん音頭は「左衛門音頭」「祭文音頭」ともあらわされ、新温泉町岸田のさえもん踊りが元になっている。岸田のさえもん踊りは、鎌倉時代に一遍上人が山陰を巡回した時に「さいもん」と名付け、念仏踊りをして普及したと伝えられている。「熊谷直実」、「伊勢音頭」、「俊徳丸」、「藤吉出世」など多くの芸題をもっている。丹波市域では回答が寄せられた地区の大半がさえもん音頭を踊っている。一方、篠山市内では濃密な分布とまでは言えないが、全市域に渡って分布している。（分布図５）

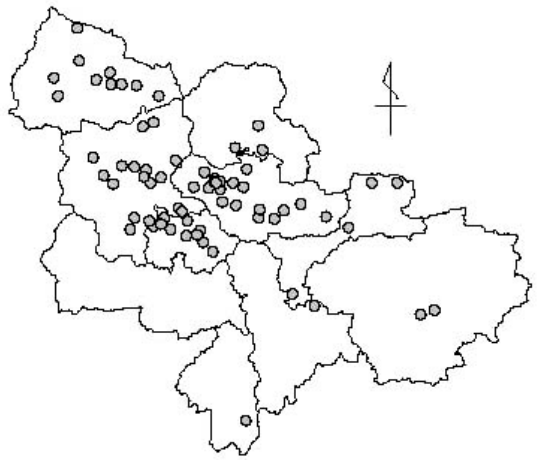
江州音頭は、近江国つまり滋賀県を発祥の地とする音頭で、幕末に祭文語りの修行をした西沢寅吉が八日市祭文音頭を完成させ、明治時代のはじめに八日市（現東近江市）から豊郷（現犬上郡豊郷町）を中心として広まったと伝えている。丹波市域で５ヶ所、篠山市域で１０ヶ所ほどである。

播州音頭は、三木市吉川町に伝えられていた吉川音頭に、明治３０年代に節回しに工夫が加えられたものが次第に広まり「播州音頭」と呼ばれて周辺地域に流行していき、昭和１０年ごろが最盛期であったという。丹波市域では氷上町石生新町、篠山市域では細工所など数ヶ所である。

福知山音頭の発祥は、天正年間に明智光秀が丹波攻めの後、亀山（現京都府亀岡市）と福知山（同福知山市）を領地に賜り、石垣修復や天守閣を築くための石材等を領民たちが運ぶときの掛け声「ドッコイセ」をおもしろおかしく歌うようになったのがはじまりと伝える。丹波市域では１５ヶ所で、篠山市域では５ヶ所で踊られている。

分布図４　デカンショ節の分布

分布図５　さえもん音頭の分布



分布図６　黒井音頭の分布

また、三田市貴志を発祥の地とする三田音頭が山南町金屋・南中・和田で踊られ、かつては奥でも踊られていた。

丹波市域でもっとも集中して踊られているのが、丹波市春日町黒井で生み出された黒井音頭である。尺八・三味線・太鼓などの囃子に合わせ、提灯が飾られた音頭台の上で音頭取りたちが美声を競い合う音頭を取り、その周りを青年たちを中心に踊ったという。現在でも丹波市内では春日町域の大半が黒井音頭を踊っている。（分布図６）

盆踊りの音頭は戦後レコードやテープが使用されることが増えた。音頭取りたちの肉声での音頭を聞きながら青年たちの踊りの輪が広がっていく様子が盛んであったのは、戦前の昭和１０年代という地域が多い。戦後しばらくの青年活動も盛んであったころを過ぎると、参加者も減り、地域の交流を維持するためにかろうじて続けているという地域も多いという。

（参考文献）

植木行宣　『山・鉾・屋台の祭り』　白水社　２００１年１１月
喜多慶治　『兵庫県民俗芸能誌』　錦正社　１９７７年９月
『兵庫探検』民俗編　神戸新聞社　１９７１年
『兵庫県の民俗芸能－民俗芸能レッドデータブック－』　兵庫県教育委員会　１９９７年３月
『山車・屋台・曳山－長浜曳山祭の系譜を探る－』　市立長浜城歴史博物館　１９９５年１月
原田三壽　「京都府丹波の民俗芸能について」　平成１０年度講座「丹波学」　丹波の森公苑　２０００年３月
『三田音頭「今とむかし」』　三田音頭保存会　１９９９年３月
粕谷宗関　『播州屋台彫刻史－野の花は永遠に－』　私家版　１９８８年
藤本幸男　『丹波市の太鼓台』　私家版　２００５年３月

４　丹波地域民俗芸能の現状と課題

（１）はじめに

丹波地域には、国選択無形民俗文化財の青垣翁三番叟（昭和４９年／八幡神社祭礼保存会／丹波市）や波々伯部神社のおやま行事（平成１５年／波々伯部神社氏子／篠山市）をはじめ、県指定無形民俗文化財の小野原住吉神社の田楽（平成１５年／小野原住吉神社五ケ宮総代／篠山市）、木津住吉神社の田楽（平成１５年／木津住吉神社田楽踊保存会／篠山市）など、各地区での祭礼行事にともなって特色ある民俗芸能が数多く伝承されている。平成９年に兵庫県教育委員会が実施した『兵庫県の民俗芸能―民俗芸能レッドデータブック―』の悉皆調査票には、丹波地区（現篠山市、丹波市）において、３２の民俗芸能が紹介されている。そのなかには、青垣町市原の八幡庵獅子神楽舞（市原神楽保存会、昭和６１年より中断）、今田町市原の神楽（田楽）（昭和２８年頃廃絶）、同地区の雨乞踊（大正２年以降廃絶）など既に実施されていないものが含まれている。時代の流れとともに各地区の状況も変化し、祭礼そのものや民俗芸能を維持、継承することは容易なことではなくなってきている。

ここでは、今回の「丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査」のアンケートに記入があった「継承上の現状と課題」と「その他意見」という自由記述をもとに、各地区の民俗芸能の現状の一端を紹介するとともに、今後の課題について若干の提言を試みたい。

（２）民俗芸能の現状―アンケートの記述から―

今回のアンケート調査は「屋台・山」「盆踊り」「道具」を中心としたものであったが、「その他の芸能」という項目をたて、現在行われているもの、廃絶したものも含め、回答をお願いした。その質問の中に、「継承の現状をお書きください」「継承していく上での課題をお書きください」という項目を設け、自治会及び保存会の抱える課題を自由に記述していただいた。ここでは、そのなかから何件か紹介し、民俗芸能の現状を考えたい。

まず、後継者の育成や確保に苦慮する回答がいくつかある。順次紹介してこう。

【回答１】氷上町中野「奴行列」

変化：奴の宿は一戸が当番で行っていたが、費用もかかることから、公民館で３人の当番が当たることになった（当日の奴のまかない等、宿から旅立ち宿に帰る）費用も区が持つようになった。

継承の現状：毎年、内尾神社の秋の大祭にお供、また県などのイベントに参加させていただいている。

継承の課題：高齢化、また少子化のため、年々難しくなっている（当区２０戸）。

意見：継承していくためにも、補助金の支援をお願いしたい。

【回答２】氷上町佐野「佐野式三番叟」

継承の現状：裏方と呼ばれる伝承は続けているが、舞謡を演じる児童が少ないため、２ー３年は休演中です。

継承の課題：少子化の解決が絶対条件です。

【回答３】春日町稲塚「稲塚風流神踊」

変化：１３曲あったが８曲が残っている。昔は、男子だけで踊っていたが、子供が少なくなり、神子は女の子も入っている。

継承の現状：毎年８月頃に練習

継承の課題：継承者不足

【回答４】春日町鹿場

変化：御輿か樽御輿だったものをフトン三段御輿乗用台車付（平成１８年購入）

継承の現状：村内の秋祭りを伝承したい

継承の課題：御輿の担ぎ手不足と高齢化、少子化による御輿乗り不足

【回答５】山南町金屋「金屋神楽舞」

継承の現状：金屋神楽奉賛会を有志で組織継続して自治会より年間１０万円の予算を計上運営している。

継承の課題：若い人が会に入らないので困っている。

意見：広く知っていただいて継承していきたい。

【回答６】市島町大森「奴道中」

変化：大正期頃から御輿が導入された。当時は９社。むかしは”やぶさめ”もあった。神馬も飼育していた。

継承の現状：昭和３５年頃から一宮神社に６社が集合するのは途絶えていたが、昭和５０年代に復活。

継承の課題：御輿一台に５０人～１００人の担ぎ手が必要。高齢化、過疎化で不足している。確保が・・。

【回答７】篠山地区呉服町

意見：伝統文化を継承してゆくことが私たちの使命です。直ちに協会を設立して保存に務めなければならないと思います。私達は伝統ある春日神社秋祭りの神楽、鉾山、太鼓みこしを大切にしています。特に鉾山には費用もかかり囃子をする子供も減り続けていくことが困難ですが地域のみんなが力を合わせて続けていこうと思っています。又、丹波内外へこの保存、継承がしられることによって何らかの新しい祭りの形態が考えられたりするかも知れないと期待します。（例えば山車の曳行に近所の方でも参加できるとか）又、鉾山や太鼓みこしの物だけでなく祭りの運行や形も保存に値するものと思います。

【回答８】篠山地区上二階町

意見：鉾山の経年劣化がはげしく、修復には多額の費用がかかります。鉾山本体、刺繍などの飾りを扱う職人が不足しています。少子高齢化で参加人数が不足し、人員確保に苦労しています。

【回答９】篠山地区瀬利

意見：祭礼の出し物（太鼓山、ダンジリ外）は今後を続けていきますが乗子、カキ手共不足しており、近隣集落との合同で出していく方向になるだろう。又、都市との交流を深め、乗子、カキ手の解消も図りたい。

【回答 10】篠山地区福住上「水無月祭打込囃子」

継承の現状：後継者難から１０年余り途絶えていたが、昨年民間団体の助成を契機に復活できた。

継承の課題：後継者の確保、楽器修理費の捻出

【回答 11】篠山地区草ノ上

意見：少子高齢化過疎化が進行し旧村雲村左近神社祭礼のヤマも乗り子がいなくなりケンケン山も殆どできなくなっており困っている。何か対策がないかと

【回答 12】丹南地区一印谷「イノコ」

継承の現状：絶えて久しいため、この行事も忘れ去られている

継承の課題：子供が居ない

【回答 13】丹南地区今田町木津「木津住吉神社田楽踊り」

起源：昔から行っていたが昭和３７年頃途切れ、昭和５６年復活し現在に至っている。

継承の現状：木津住吉神社田楽踊り保存会が継承している

継承の課題：踊り子がこれから先少なくなるので後継者問題が大きな課題

【回答 14】丹南地区今田町下小野原

意見：当地区では春と秋に祭りがあるが、年々参加する人が少なくなっている。戦後世代の人は、（特に若い人）祭りや、伝統芸能を守っていくという意識がなくなっているように思われます。時代の流れもあるが、若い人が少なくだんだんと継承していくのがむずかしくなっているのではないかと思われる

いずれも少子・高齢化による後継者不足を課題にあげている。【回答１・２・３・５・６・13】は風流踊りに分類される民俗芸能を継承する地区である。かつては、踊りの担い手の年齢や性別

が決まっていたところも多い。たとえば、【回答２】「佐野秋季式三番叟」は、兵庫県民俗芸能調査会編『ひょうごの民俗芸能』によると、

式三番叟奉納の準備・運営を行うのは、かつては村の青年会であったが、現在では昭和４６年につくられた保存会が行っている。保存会は、村に住む１８歳～４６歳までの男子で、現在２０名ばかりである。毎秋口に保存会員が集まり、式三番を奉納する「踏子」を人選する。翁は保存会員の中から選ばれる。千歳役の二番叟は、小学２～３年生の男子、黒式尉役の三番叟は、小学６年生～中学１年生の男子から選ばれる。毎年「踏子」を変えるのを原則としているが、二番叟・三番叟に適任者がいない場合へ奉納を中止したり、翁役は二度目という保存会員もある。

と報告されている。戦後一時中絶したものの、保存会の結成とともに復活した。しかし、今回の回答によると、ここ数年休止せざるをえない状況にあるようである。

また、【回答 14】「木津住吉神社田楽踊り」のように県の文化財指定を受け、現在、維持できている芸能においても将来後継者が育成できるかどうか危惧されている。それぞれの地区の置かれている状況は異なるものの、少子・高齢化の波のなかで、民俗芸能の維持、継承が極めて困難な状況にあることが理解できよう。

このことは、風流踊りのような民俗芸能だけではなく、屋台や山が出る祭礼行事でも同様である。【回答４・６・７・８・９・11】である。高齢化による担ぎ手の不足、少子化による乗り子の不足が課題として記されている。【回答４】では昨年、屋台を購入したばかりであるものの、担ぎ手・乗り子ともに不足しているとある。

さらに、今回のアンケートでは、民俗芸能とはいえないものの地区の民俗行事についての回答もあった。【回答 12】のイノコである。かつては、丹波地域の各地で秋の収穫のあと、イノコの餅をつくり、子どもたちが唄を歌いながら家のカドで「イノコつき」を行っていた。しかし、少子化や離農にともなってこの行事も次第に行われなくなっている。このほか、川裾祭があげられている。

【回答 15】氷上町朝阪

継承の現状：昔から行ってきた行事である。今後も行う目的を伝承していきたい。

継承の課題：川裾を伝承していく上で、何のために行っているかを知らない若者が増えてきている。その意味を伝承していく必要がある。

生活の変化とともに、本来その行事が行われる目的が薄れていくなか、伝承していく意味を再確認しなければならないという指摘であり、重要である。

次に、民俗芸能を維持、継承していくにあたって経済的な問題を指摘する回答もあった。

【回答２】「継承していくためにも。補助金の支援をお願いしたい」【回答９】「鉾山の経年劣化がはげしく、修復には多額の費用がかかります」【回答 11】「昨年民間団体の助成を契機に復活できた」「楽器の修理費の捻出」などである。この他にも、次のような回答があった。

【回答 16】青垣町今出「裸祭」

継承の現状：裸祭は保存会もあり絶やす事無く毎年多くの方々が参拝に来られます。春日、和田山道路開通により多くの方々が丹波市を通過して行くのではなく京阪神からもこの丹波に来ていただき大勢の方の参加を望んでいます。裸御輿の裸衆の人数が減少しつつあり今後ホームページなどを開き多くの方の参加を望んでいます。

継承の課題：祭礼において裃と袴を付けていただく人が今まで決められた地域の人で有った所、住人も少なくなり他の役を受けもっている時など裃を付けられず、話し合いに寄り、今年から遠阪地区全体で裃を付ける方向に変えた所、裃は今出部落の各家々で家紋を入れ個人で作っていたもので、この様に方針を変えることに寄り色んな人が着けていただく為には、紋が入れられず、新しい裃袴を作る事になるのですが、何分高額なもので中々揃えられず、考えていかなければいけない所です。

【回答 17】山南町前川

意見：…毎年の行事で約１ヶ月乗り子が練習し（１日２時間）太鼓の痛みが激しく練習と本番と太鼓を分ける必要があるが不可能なため、出来なければ皮の張替えが約２０年使用しているため、必要な時期が近く発生する予算が大変です。…

【回答 18】篠山地区畑井

意見：波々伯部神社のキュウリ山みこし各集落の山車すべて維持管理するのに大変である。修理費が高くつく。

【回答 19】丹南地区味間南

意見：地域の伝統は、地域で継承していくものだと思うが、多くの経費を必要とする場合があると思われる。多額の費用を投入すれば、集落会計を圧迫することもあり、主要な民俗芸能については、経済面の支援も必要と思われる。

いずれも、衣裳・道具・山車などが劣化し、老朽化しているものも多く、その維持管理に相当の経費を必要とし、地域の財源で賄うことが困難であるという意見である。

さらに、民俗芸能を継承していく意識に触れた回答もあった。青垣町市原の「八幡庵獅子神楽舞」である。『兵庫県の民俗芸能―民俗芸能レッドデータブック―』には、

悪魔払い、三番叟、幣踊り、剣の舞、ササラ天狗、獅子踊り、榊獅子を奉納する。昭和６１年より中絶。

とある。今回のアンケートでは、

【回答 20】変化：現在休止中（休止前とは変化なし）

継承の現状：２０年近く前から休止している。若い人が消極的、役によっては嫌がる（例えばお多福の役）楽器（特に笛）がうまく使えない（横笛を鳴らせない）

継承の課題：子供に役を与えて継承していくのも一つの方策かも

と記されている。神楽の伝承が中断した理由が、「若い人が消極的、役によっては嫌がる」というように継承する意欲が薄れた点と「楽器（特に笛）がうまく使えない」という技術の継承が順調ではない点があげられている。

また、同地区のアンケートのほかの箇所には、「子供みこし」の記載があり、

相当古い歴史のある神楽舞が１０数年前に途絶えた時集落の若者が中心となり約一ヶ月かけて自前で製作したみこし…言わば現代風の手作りみこしで、従来行っていた村祭り（１０月１０日前後の日曜日→昔は９日夜と１０日の昼に神楽舞を行っていた）日に村内を子供中心に曳きまわす。…

と記されている。神楽の中絶の後、子供みこしが祭礼の風流として登場したのである。神楽に代わって、手作りの子供みこしが新たに創出されたということになる。詳細な経緯は今後の調査を待たなければならないが、この地区では、昭和６１年に民俗芸能や祭礼行事のあり方に対する大

きな意識の転換があったことが推察される。

【回答 14】には「戦後世代の人は、（特に若い人）祭りや、伝統芸能を守っていくという意識がなくなっているように思われます。時代の流れもあるが、若い人が少なくだんだんと継承していくのがむずかしくなっているのではないかと思われる」とあり、【回答 15】には「川裾を伝承していく上で、何のために行っているかを知らない若者が増えてきている。これらの回答はその意味を伝承していく必要がある」という記載もある。単に民俗芸能の形式だけを継承するのではなく、若年層にその意味や意識を伝えていく必要を訴える。

以上が、今回のアンケートの回答における記述からみた丹波地域の民俗芸能がおかれている現状と問題点である。もちろん、祭礼行事や民俗芸能を継承しているすべての地区が一律に同じ問題を抱えているわけではない。また、丹波地域の自治会に対しての悉皆アンケートであるが、すべてが有効回答ではない。しかしながら、現在、多くの地区や祭礼が抱えている問題が浮かび上がってきたと思われる。ここで、丹波地域の民俗芸能が現状抱えている問題点を整理すると以下のようになる。

① 民俗芸能や祭礼行事の後継者の不足

少子・高齢化により、祭りや芸能の担い手である年齢層の人数が不足している。地区によっては、保存会を組織しても、維持、運営できないほど深刻な問題を抱えている。

② 道具や衣裳の維持、修復に必要な経費の不足

現在伝承されている民俗芸能に使用されている道具や衣裳は老朽化したものが多いうえに、毎年の行事で使用するため劣化が激しい。それらの道具を修理する技術者の数も限られており、経費を地区で捻出するのが困難である。多くの地区が助成金の補助を望んでいる。

③ 民俗芸能や祭礼行事に対する意識の希薄化

民俗芸能や祭礼行事を伝承していく意欲が、若年層ほど希薄になりつつある。行事の意味を理解せず、行事から心が離れていくケースもある。

（３）丹波地域の民俗芸能の課題

前節では、丹波地域の民俗芸能の抱える現状をアンケートの記述から検討し、おおまかに三つの問題点があることを述べてきた。それでは、それらの問題点を解決するために、どのような課題があるのか。いくつかの事例を紹介しながら、丹波地域の民俗芸能を保存・継承し、「地域づくり」や「地域コミュニティの活性化」に活用するための課題を考えてみたい。

まず、第一の問題点である担い手不足については、回答の中につぎのような取り組みが紹介されている。

【回答４】「稲塚風流神踊」である。戦前は稲塚・大野の氏子の長男のみに踊り手が限定されていた。しかし、平成４年に「稲塚風流保存会」が結成されて、保存、継承につとめるとともに、１０歳前後の男子がつとめる「カンコ」役には女子の児童も参加している。担い手の制限の見直しは、一つの方策といえよう。しかし、稲塚の場合、それでも「後継者不足」が課題として記載されている点は注意しておかなければならない。

この他、【回答７】「篠山地区春日神社秋祭り」の「丹波内外へこの保存、継承がしられることによって何らかの新しい祭りの形態が考えられたりするかも知れないと期待します。（例えば山車の曳行に近所の方でも参加できるとか）」や【回答９】「近隣集落との合同で出していく方向になるだろう。又、都市との交流を深め、乗子、カキ手の解消も図りたい」という提言もある。屋台

や鉾山の担ぎ手の不足、乗り子の不足を地区の外から補おうという提案である。

篠山地区春日神社の秋祭りでは、鉾山と太鼓みこしを出す地区があるが、さらに神社の神輿が輪番で回ってくる。かつて、小さな町では担ぎ手が足りなくなるため、氏子域ではない農村と契約し、担ぎ手を雇ってくることがあったという。また、少子化によって乗り子が少なくなることを解消するために、同一小学校区の他地域（氏子外）の子供からも乗り子をひろく募集している地区もある。いつの時代も人員の不足という問題はあり、その都度、地域の実情にあわせて解決が図られてきた。先人たちの歩みを知り、その知恵を記録保存し、蓄積していくことも重要な課題である。また、都市との交流にどのような形態が考えられるか今後模索してくべき課題と思われる。

次に、民俗芸能を維持していくための財源の確保である。まず、文化庁や民間団体の公的な助成金の活用が考えられる。これらの補助は主に文化財保護の観点からのものが多い。一方、「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及びと規定地域商工業の振興に関する法律」（通称、おまつり法）にもとづく観光資源として民俗芸能を活用する動きがある。この二つの社会的な動きが民俗芸能に与える影響について論じた橋本裕之氏は、

> 当事者の実践という地平において無形民俗文化財と観光資源という二つの社会的な文脈は必ずしも対立していない。というよりも、文化財保護法とおまつり法を区別する基本的な理念の差異は無意味化していかざるを得ない。

と指摘している。文化財保護と観光資源化を対立の構図で理解する姿勢に対し、現実に民俗芸能を実践している人びとにとっては、両者は対立するものではなく、いずれも選択肢の一つであるというのである。今日、「地域の活性化」の名の元に民俗芸能に向けられる外部からの眼差しが多様化しているなか、どのような道を選択するかが、各地区の課題であるといえよう。

最後に、民俗芸能の継承に対する意欲や意識の希薄化である。この点は、産業構造の変化や生活の変化など様々な要因が考えられる。「いま」・「ここ」で民俗芸能を伝えていく意味は何か。この問題は常に問いかけられなければならない。上記の人的問題と経済的問題が解決したうえで、民俗芸能の保存・継承に関する最も根幹的な問題がここにある。

各地区で自分たちが伝えてきた民俗芸能が他地域のものと比べてどのような特色があるのかを知り、地区のアイデンティティを見直すことも重要であろう。丹波地域では、平成１７年度に「民俗芸能祭 in たんば」を開催し、本事業においても、「民俗芸能 in たんばフォーラム　丹波の民俗芸能を探る～その保存・継承と地域の役割～」を開催する。

全国的な規模では、文化庁が企画するブロック別民俗芸能大会、地域伝統芸能活用センターが企画する地域伝統芸能全国フェスティバル・地域伝統芸能による豊かなまちづくり大会がある。後者では、地域伝統芸能大賞などの表彰も行われている。

兵庫県では、「兵庫県無形・民俗文化財保護協会」が平成１２年に設立され、

① 無形・民俗文化財の保護に関すること
② 無形・民俗文化財の普及、啓発に関すること
③ 無形・民俗文化財保護活動の顕彰に関すること
④ 無形・民俗文化財の調査、研究、並びに後継者育成の支援
⑤ 無形・民俗文化財の保護に関する諸問題の協議、情報交換

などの目的で活動している。平成１８年１月には、「ふるさと民俗芸能発表会」が催され、市川町文化センターで９団体の獅子舞が披露された。その際のエピソードとして、神戸新聞に投稿され

た記事を紹介したい。平成１８年１２月１５日（火）夕刊「孫の獅子舞演技に涙」である。

先日、市川町でふるさと民俗芸能の発表会が開かれ、私も見に行きました。播州一円に伝わる、氏神様に奉納する獅子舞が出演し、私の住む町のも出たんです。３０歳になる孫が舞うことになりましてな。私もずっと若い人に教えてました。踊りや笛、太鼓など地域から３０人ほど参加。脳こうそくで倒れて手足が不自由なんで、行きたいけどあきらめてたら、皆がマイクロバスで一緒に連れてってくれました。会場のホールは満席。いずれ劣らぬ見事な演技ばかりでした。野外で舞うことが多いんですが、音響がよく、照明も獅子の姿を浮きあがらせていました。孫の演技を見ていると知らず知らず涙が出てきて「長生きできてよかった、生きててよかった」としみじみ思いました。この行事に参加、お世話くださった皆さんに感謝し、また古くから伝わる芸能が永久に保存されることを願っています。（加古川、無職、男、８８）

民俗芸能を限られた時間の舞台で演じることについては、賛否両論あるものの、民俗芸能大会への出演は、民俗芸能の伝承者にとって、自らを見直すきっかになるものと思われる。また、多くの観衆の前で演じることの達成感や満足感も民俗芸能を担う人びと、なかでも次世代の子どもたちにとっては貴重な体験となるであろう。

次に、本事業で実施した小学校での出向公演である。民俗芸能が継承される場は、世代間交流の場でもある。学校教育の場だけではなく、地域コミュニティの教育のなかでも芸能の技の継承を通じた世代間の交流が大切である。生活様式の変化のなかで希薄になりがちな世代間のコミュニケーションの場として、民俗芸能の継承を生かす方策を考えていくことも重要な課題である。

さらに、文化資源としての民俗芸能を広く丹波地域だけではなく、啓発、広報していくことも大切である。本事業で作成した「丹波地域民俗芸能ＧＵＩＤＥ　ＭＡＰ」やＨＰでの紹介などにより、都市部を中心とした多くの人びとが足を運ぶきっかけ作りが必要であろう。アンケートにも【回答 16】青垣町今出の裸祭のように、「京阪神からもこの丹波に来ていただき大勢の方の参加を望んでいます」という声がある。民俗芸能をできるだけ多くの観衆に見てもらうことは、演じ手の意欲にも結びつくものと思われる。

以上、民俗芸能を継承していく意欲を喚起するために、民俗芸能大会の開催、世代間交流の場の設定、他地域への啓発などを紹介した。アンケートのなかには、【回答 21】山南町太田のように、

意見：…当太田自治会には年２回の大きな祭があり、地域の活性化、若者が定着する元気な自治会作りに取り組んでいます。おかげさまで祭の参加者は大幅に増え、こどもから高齢者に至るまで自治会全体元気印です。これも太鼓と神楽のお陰と思っています。「非常に価値のある」と評価されました太鼓台も老朽化が激しく修理にも１０００万以上の費用がかかり自治会だけでは対応が難しいのが現状であります。今回の調査により、丹波地域の伝統文化を再評価され、保存・継承に向けた支援方策がとられますよう期待しております。

という回答もあり、地区の祭礼の歴史の発掘とともに、現在の祭礼が活発であると記されている。この太田には「大歳神社奉納神楽舞」があり、どのように継承されているのか知りたいものである。

平成１９年２月２５日に丹波の森公苑で開催された本事業のフォーラムでは、農村歌舞伎葛畑座（養父市）・水無月祭鶴寿山打込囃子保存会（篠山市福住上）・稲畑式三番叟保存会（丹波市）

の３団体の報告があった。いずれの団体も民俗芸能が一度途絶えた期間を有しており、復活にいたる経過を報告いただいた。

農村歌舞伎葛畑座では、地域が一つの目的を達成するためのエネルギーに満ち、活性化したことを述べられた。また、後継者の問題を解決するために、地区外からの座員やボランティアの募集など新しい試みも行われていることが紹介された。

鶴寿山打込囃子保存会の報告では、復活するにあたって、地域の意識・リーダーシップ・行政の協力の三点を指摘したうえで、地域の中堅の人のリーダーシップの大切さを強調された。そして、課題は抱えているものの、復活したことによって、世代間の交流が盛んになったことを指摘された。

稲畑式三番叟保存会では、復活前は沈静化していた祭礼が復活とともに賑やとなり、バザーや運動会など他の行事にも積極的に参加するようになったと述べられた。また、民俗芸能を維持していくためには、記録することの大切さや保存団体の横のつながりが必要である点も強調された。

これらの地区のように民俗芸能を復活し、活発に継承されている事例を調査・報告し、多くの問題点を抱えている他地区の今後の参考にすることも急務ではないかと思われる。

（４）おわりに

以上、ここでは今回の「丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査」のアンケートの記述をもとに丹波地域民俗芸能の現状と課題について述べてきた。今回の悉皆アンケート調査は、丹波地域の民俗芸能の全体像を把握するマクロな視点にたった貴重な資料であり、今後の丹波地域の民俗芸能を考えていく基礎データとなると思われる。しかしながら、一方で、各地区の民俗芸能には継承するにあって、その地区独自の個別の課題や問題点を抱えている。これまでも、氷上郡（現丹波市）教育委員会の報告書のように個別の民俗芸能についての詳細な報告書が出されている。今後は、個別の民俗芸能に関するより詳細な記録を、映像記録を含めて作製するとともに、その地区の抱えている課題をも記録していく必要があると考える。

最後に、その生涯で地球４周分を歩き、日本の各地で村おこし、町おこしを行った民俗学者、宮本常一の１９７９年１１月「生活の伝統」という講演での言葉を紹介したい。

> 普通伝統と申しますと、古いことになじんで、そうして古いことを大事にしていくのが伝統だとお考えになっておられる方が多いのではないかと思いますが、伝統というのはそういうものではなく、自分の生活をどのように守り、それを発展させていくか、いったか、その人間的なエネルギーを指してしるものであろうと思うのです。
>
> （『炉辺夜話』、河出書房新社、２００５）

丹波地域に伝統に根ざした「人間的なエネルギー」あふれる豊かな民俗文化が息づくことを期待したい。

■参考文献

丹波文化団体協議会編　１９９６　『丹波の祭と民俗芸能』　神戸新聞総合出版センター
兵庫県教育委員会　１９９７　『兵庫県の民俗芸能―民俗芸能レッドデータベース―』
兵庫県民俗芸能調査会編　１９９８　『ひょうごの民俗芸能』　神戸新聞総合出版センター
氷上郡教育委員会　１９９８～２０００、２００２～２００４　民俗芸能調査１～６
橋本裕之　２０００　「民俗芸能の再創造と再想像―民俗芸能に係る行政の多様性を通して―」

５　資料編

（１）資料編について

・平成１８年度丹波地域民俗芸能保存・継承支援事業によっておこなわれた「丹波（篠山市・丹波市）地域民俗芸能支援活動調査」の結果を中心に、「２　丹波の民俗芸能」の分類に準じて、芸能毎の一覧にまとめた。

・「丹波（篠山市・丹波市）地域民俗芸能支援活動調査」に未回答あるいは、未記入であっても、これまでの調査・研究によって明らかになっている事例のある場合は、データを補った。

・本文は原則としてアンケートの表記を用いた。「デカンショ節」「デカンショ音頭」「でかんしょ節」あるいは、「乗り子」「乗り児」等の表記の相違は、アンケートの表記に依る。

・山や盆踊りは事例が多く、これまで丹波地区全域にわたった調査は存在しない。正確性を確認できないデータも含まれているが、丹波地区の全体の傾向を掴むには充分といえよう。今後、個別事例に即した調査の必要性を指摘し、一覧を掲げる。

・「丹波（篠山市・丹波市）地域民俗芸能支援活動調査」にもれた事例は多くあると思われる。今後の充足をはかるとともに、地域の方々による地域の文化遺産の再認識、「再発見」の契機となれば幸いである。

①　神楽

地区	自治会名	呼称	場所	時期
		内容（役名・演目等）		
丹波市				
氷上町	新郷	西方太神楽	伊尼神社	10 月第 2 日曜日（隔年）
		江戸時代末、伊勢の大神楽に習ったという。 演目：剣の舞・幣踊り・しんてい・おさん囃[a] 谷村新発意おどりと隔年におこなわれる。次回、平成 20 年 10 月。		
青垣町	小和田	大神楽	八幡神社	10 月体育の日の前日
		ねり込みに続いて大神楽が舞われる。 役名：獅子・天狗。 演目：御庭浄め（1. 神刀を口にして舞う、2. 神刀を抜いて舞う、3. 御幣・鈴を持って舞う、4. 御幣を持って舞う、5. 天狗と戯れて舞う）[c]。		
	新町	新町大神楽	水神祭 八柱神社	8 月 20 日 10 月 9 日
		演目：悪魔払い、神楽舞、修羅獅子、天狗の舞[a]		
	市原	神楽舞	市原八幡神社	10 月 9 日、10 日
		役名：獅子・天狗・お多福。 演目：三番そう・あくま払い・剣の舞。 約 20 年前から休止中。		
春日町	野瀬	獅子舞	公民館	10 月第 1 日曜日
		役名：役者（獅子・天狗）。 役者が、扇、刀、鈴などを持ち、太鼓、笛に合わせて舞う。		
	上三井庄	おかぐら		
		詳細未詳		

山南町	青田	青田神楽	大歳神社	体育の日の前の土・日曜日
		演目：荒神払い・四方舞・剣の舞・地舞・花獅子・鈴の舞・背継[a]。 神社境内で奉納し、各戸をまわる。		
	上滝	上滝若者会神楽	山口神社	体育の日の前日
		若者会によって約 50 年前からおこなわれている。 祭の前日に各氏子の家で舞い、当日は神社の拝殿で舞う。		
	太田	大歳神社奉納神楽舞	大歳神社	体育の日
		役名：神楽（ゆたん持ち）・天狗・笛吹き。 演目：竜の舞・豆拾いの舞・鈴の舞・地面の舞・笹の舞。		
	玉巻	神楽	賀茂神社	体育の日
		江戸時代にはじまったという。保存会（16 名）で継承。神社内と集落内各家を回って舞う（地家回り）。 役名：獅子・天狗・与市兵衛・定九郎・ひょっとこ・おかめ等。 演目：剣の舞・神楽舞・背継ぎ（背継ぎは廃絶）。		
	金屋	金屋神楽舞	賀茂神社	体育の日
		金屋神楽奉賛会で継承。家庭の玄関と神社の広場で舞う。 役名：獅子舞・天狗。 演目：笹の舞・七五三・今づり・龍の舞・鈴の舞・毬くわえ。		
	井原	神楽舞	日吉神社	体育の日
		今（昭和 63 年）から 150 年ほど前、大工の駒蔵という者が旅先で獅子舞を覚えてきて、伝兵衛という者が張り子で獅子を作り、駒蔵が若い連中に教えたのが始まりという。現在は、木彫りの獅子頭を用いる。 例祭に神前に奉納し、集落内全戸をまわり荒神払いをする。 役名：獅子（雌・雄）・天狗。 演目：本舞・四方舞・天狗の舞・村舞[d]。		
	岩屋	神楽	焼尾神社	体育の日とその前日
		詳細未詳。		
	奥	神楽	一ノ宮神社	体育の日を中心とした土日曜日
		昭和 32 年に、山南町岩屋から教わった。自治会内各戸毎と神社の境内で舞う。 役名：獅子。 演目：剣の舞・鈴の舞・あくま払い。		
市島町	酒梨		三輪神社	
		役名：獅子。 演目：剣の舞、花獅子、鈴の舞 刀、鈴、御幣、太鼓などをもって舞う。現在は実施していない。		
篠山市				
篠山地区	寺内	獅子舞	大売神社	
		特に定まった所作はなく、担当する村が独自な演出で獅子をまわす[b]。		
西紀地区	川北	獅子舞		
		獅子頭を持って各家の祓いをする。定まった所作はない。		
	上板井	獅子舞	川内多々奴比神社	
		明山株から獅子舞が奉納されたものであり、獅子頭は明山家からでる。明山株から奉納されるが、集落のものである。現在は、二宮神社から一宮神社（川内多々奴比神社）へ向う際、そして戻る際に、坂の口の「獅子の座石」という岩の前で獅子が岩の回りを回る。また一宮神社の神殿と鳥居の間を七返し半めぐる（七辺返し）。		
	小坂	獅子舞	明月神社 河内多々奴比神社	秋祭り

		伊勢の大神楽から学んだという。獅子舞保存会によって明月神社と河内多々奴比神社の祭礼で演じられる。 二頭の獅子舞が舞う。詳細未詳。		
丹南地区	西吹	獅子舞	二村神社	10月第三日曜日
		秋祭りに公民館から神社拝殿まで獅子舞が参加する。		
	当野		オトウ	6月下旬の亥の日
		オトウの当番の家で接待をしている途中、各戸を回った獅子が、当番の軒にさしたチマキを口にくわえて落とす所作を持つ[(b)]。		

(a)　兵庫県教育委員会編『兵庫県の民俗芸能――民俗芸能レッドデータブック――』（兵庫県教育委員会、１９９７年）
(b)　本文参照。
(c)　青垣町編『青垣町誌』（青垣町、１９７５年）
(d)　山南町誌編纂委員会編『山南町誌』（山南町、１９８８年）

②　田楽・田植え神事

地区	自治会名	呼称	場所	時期
		内容		
篠山市				
篠山地区	藤坂	御田植祭（おんたうえさい）	春日神社舞堂	5月10日に近い日曜日
		禰宜が、スキ役1人・マグワ役1人・クワ役1人・牛追役1人・田植役2人と、進行役1人、はやしをおこなう役1人を分担しておこなう。 スキ・マグワ・クワの模造品を用い、苗に見立てたカツラを植える。昭和末期に、面（ひょっとこ、おかめ、牛）を用いるようになり、進行も整備された。		
今田地区	今田町木津	田楽	木津住吉神社	10月8日、9日（秋のオトウ）
		ササラ4人、締太鼓2人、幣かたげ1人が、「一二等摺り合わせ」・「外摺り」・「内摺り」・「入れ代わり」・「ササラ進み」・「太鼓進み」・「南北摺り回り」を舞う。また、全員で奉納する「巫女舞」・「跳び（トートイチ）」がある[(a)]。		
	今田町上小野原	神舞（蛙踊り）	小野原住吉神社	10月第1週の日曜日
		ササラ5人、締太鼓3人が、「やすみ」・「こつ」・「しこう」の舞を演じたのち、締太鼓の3人が一人ずつ「いず舞」を舞う[(a)]。		

(a)　兵庫県教育委員会編『兵庫県の民俗芸能――民俗芸能レッドデータブック――』（兵庫県教育委員会、１９９７年）

③風流

③-１　風流踊り

地区	自治会名	呼称	場所	時期
		内容（役名・曲目・道具等）		
丹波市				
柏原町	大新屋 田路 挙田 鴨野 北山	新法師踊	新井神社	10月10日
		曲目：入端、露の踊、菅笠踊、世の中踊、大蛇踊、燕踊、宝踊、清水踊、住吉踊。 元は雨乞踊であったという[(a)]。		
	南多田	新発意踊	大歳神社	10月第2週日曜日
		音頭：羽織袴、神子：法被・袴・草履、踊頭：僧侶の衣装、ひょうたん小坊主：小坊主の衣装、太鼓：浴衣・袴・たすき・草履。道具：扇子・杖・団扇太鼓。 曲目：清水踊、長者踊、お寺踊、具足踊、大国踊、鐘鋳踊、大蛇踊。		

		元は雨乞踊であったという。		
氷上町	本郷	念仏踊り	部落内	盆
		盆の宵に、念仏講の講員が、鉦を打ちながら村内の道筋で念仏をあげて回る。新仏のある家の門口では、特に丁寧に念仏をあげる。 現在（昭和 50 年頃）はあまりおこなわれていない[c]。		
	谷村区(元は大森)	谷村新発意おどり	伊尼神社境内及び谷村区、新郷区内 9 ヶ所のお旅所	10 月第 2 日曜日（隔年）
		役名：頭 1 名・踊り子 10～15 名・大太鼓 3～4 名・小太鼓数名・音頭取 3 名。踊り子は、先頭の赤鉢巻（頭）、その他の踊り子は豆しぼりの鉢巻に友禅着物、右手にうちわ、左手に杖の先に瓢箪。 曲目：道謡、屋敷踊、具足踊、車踊、高田踊。 総社伊尼神社の例祭に奉納され、御輿の供をして新郷区、谷村区の各お旅所で踊る。 元来は谷村区の大森隣保に伝わる踊りであった。 西方太神楽と隔年でおこなわれる。平成 19 年は、谷村新発意おどり。		
春日町	稲塚	稲塚風流神踊（ザンザン踊）	大歳神社	10 月第 2 日曜日
		役名：音頭取り、新発意、太鼓、神子。道具：唐うちわ、ささら。 曲目：道歌、願いの踊、善悪踊、近江踊、祇園踊、鐘踊、月見踊、車踊。13 曲あったが、現在は 8 曲が残っている。 昔は、男子だけで踊っていたが、子供が少なくなり、神子には女子も入っている。 元は雨乞踊であったという。		
	野村	だんだん踊	春日神社	不定期
		曲目：入羽、お寺踊、清水踊、願の踊、十九踊、車踊、鐘鋳踊、善悪踊、あんまご踊。 近年踊られていない[a]。		
山南町	草部	雨乞い踊り	八幡神社	
		昭和 10 年頃まで雨乞い踊りを八幡神社境内で踊ったという[d]。		
篠山市				
西紀地区	本郷	春日踊り	春日神社	10 月 21 日
		役名：座長、音頭 2 人、小太鼓 2 人、三味線 1 人、踊り子 8 人。 曲目：鯉の瀧昇り、豊年踊り、兵庫くどき、四季と唄、宰相頼朝はん、京都道中、忠臣蔵など 15 曲。 4 台の床几の上で、曲にあわせ、御幣、扇などを持って踊る[a]。		
今田地区	今田町今田	雨乞い踊り		廃絶[b]
	今田町市原	雨乞い踊り		廃絶[b]
	今田町釜屋	雨乞い踊り		廃絶[b]
		明治 20 年（1887）の歌本が残る。 曲目：道哥、道哥切、住吉踊、すげかさ踊り、肥後踊り、かたひら踊り、鞍馬踊り、越後踊り、中入後の道哥、鎌倉踊り、するが踊り、松虫踊り、具足踊、出雲踊り、雨乞踊り。		

(a)　兵庫県教育委員会編『兵庫県の民俗芸能――民俗芸能レッドデータブック――』（兵庫県教育委員会、１９９７年）

(b)　本文参照。

(c)　氷上町誌第一巻編集委員会『氷上町誌』（氷上町、１９７５年）

(d)　山南町誌編纂委員会編『山南町誌』（山南町、１９８８年）

③-２　造り物

地区	自治会名	造り物の奉納される祭礼	時期	内容
丹波市				
氷上町	成松区 常楽区（一部）	成松愛宕神社大祭	8月23日～24日	成松区と常楽区の一部（平成18年は、西町組、宮前組、常楽新田組、中町組、新町組、東組、中央通り組、下町組、新田組、上町組、北町組）が造り物を奉納する。 約200年前にはじまったという。
	犬岡			子供樽御輿に造り物をのせる。昭和50年頃からはじまる。
春日町	野瀬			祭礼の際、山車に造り物をのせて奉納する。
山南町	北太田			祭礼の際、屋台に造り物をのせて奉納する。
	若林	大歳神社祭礼		大歳神社祭礼の際、「山車」（明治12年〔1879〕建造）に造り物をのせて奉納していた。 現在、山車は、痛みが激しく休止中。
	小畑 西谷 山本 五ケ野 坂尻	牧山神社祭礼		明治末期まで。 四畳半ほどの舞台を持つ曳山に造り物をしつらえ奉納した。また、牧山神社境内に、藁細工の造り物を各村が相競って奉納した[(a)]。
	久下地区	伊勢参りの迎え		伊勢参りの「げこう」の迎えの趣向として、だんじりや造り物をこしらえ、素人芝居などを仕組んだ[(a)]。
篠山市				
篠山地区	小原	梅田神社祭礼	10月16日、17日	造り山にのせて造り物を奉納する。 中絶していたが、大芋小学校、大芋地区自治会などによっておこなわれる「大芋まつり」（平成18年は11月18日）で造り山・造り物が復活している。
	藤坂	春日神社祭礼	10月16日	
	藤之木 二之坪 箱谷 小野新 小野奥谷 栃梨 貝田	八朔祭り （熊野新宮神社）	8月31日、9月1日	氏子各地区より、造り山にのせて造り物が奉納される。
	下原山	日吉神社祭礼	5月5日	下原山から造り物の山が出る。 3年前まで出ていたが、造り物の山の老朽化のため休止中。
丹南地区	古市	地蔵盆	8月24日	隣保単位で持ち回りの当番を決め、当番の隣保が地蔵盆に造り物を奉納する。

(a)　山南町誌編纂委員会編『山南町誌』（山南町、１９８８年）

③-３　奴行列・ねり込み

地区	自治会名	呼称	奉納される場所・祭礼	時期
		内容		
丹波市				
氷上町	中野	奴行列	内尾神社、旅所	10月の第2日曜日（内尾神社秋祭大祭）
		警護2名、先箱2名、草履取り1名、槍2名、傘2名、小鳥毛2名、大鳥毛2名、計13名。警護は袴に杖、草履姿。奴振りは奴の衣装。槍、笠、鳥毛は腰には刀をさす。奴行列道行文言（東海道の宿場の特徴を歌いながら江戸へ向かう道行文言）を歌いながら練り歩く。 起源は明らかではないが、江戸時代末期であろうといわれている。 奴の宿は一戸が当番で行っていたが、費用もかかることから、公民館で3人の当番が当たることになった（当日の奴のまかない等、宿から旅立ち宿に帰る）費用も区が持つようになった。		
青垣町	小和田	ねり込み	八幡神社	10月体育の日の前日
		花や蕭葉をかたどった幣の上に御神燈をつけたもの18本を先頭に、腰太鼓の子供が6人、笛・鉦が並び、その後に、先頭と同様の御神燈17本（寺内集落の戸数をあらわすという）が続く。両脇や後ろに村人が高張提灯をもって行進する。ねり込みの行列は、「五葉は目出度の若松様よ……」と歌い囃しながら、鳥居から神前に至り、更に、神前で囃す[(a)]。		
市島町	上竹田 中竹田 下竹田	奴行列・奴道中	一宮神社	10月第1日曜日（一宮神社秋祭）
		先払い、挟箱、台傘、小鳥毛、熊毛を持ち、袴、衣、わらじ姿。太鼓打が、太鼓を叩きながら練る。 江戸時代からはじまったという。		

(a)　青垣町編『青垣町誌』（青垣町、１９７５年）

③-４　山

・「曳く」・「舁く」の分類は、実地調査等をおこない、改めることのできたもの以外は、アンケートの記述に従った。
・呼称は、一般的な呼称ではなく、アンケートに記入された、地域での呼称を示す。
・屋根の形式の「布団」は、播磨地区の山手の屋台に見られるような布団を積み重ねた形式の屋根、「御輿屋根」は、一般的な神輿や、播磨地域の浜手の屋台にみられる曲線を描いた宝形造（ほうぎょうづくり）の屋根を示す。「切妻」は、京都祇園祭の山鉾にみられるような切妻造の屋根を、「唐破風」は、摂津地域のダンジリなどに見られるような唐破風造の屋根を示す。
・車輪の形式の「車」は、「御所車」とも呼ばれ、祇園祭の山鉾などと同じ形式の輻（矢・スポーク）のある車輪を示す。「内」は、丸太を輪切りしたような形式の車輪が、台枠の内側にあるもの、「外」は、台枠の外側にあることを示している。
・「乗るモノの名称（人数）」は、断りのない限り、子供の人数を示している。また、「乗り子」などとある場合は、地域での呼称を示している。なお、この欄に「造り物」などとある場合は、人ではなく、造り物が載せられていることを示す。
・「その他」の項目で、「明治頃」・「昭和２２～２３年頃」のように、時代や年代を示しているものは、現在の山がその年代に制作あるいは再調されたという伝承を持っていることを示す。
・波々伯部神社の「お山」については表の末尾に別記した。

③-４-１　山～曳く

地区	自治会名	呼称	屋根の形式	車輪形式	乗るモノの名称（人数）	楽器名	その他
丹波市							
柏原町	新町	だんじり（地車）	唐破風	内			休止。現存。車輪を装置した舞台。子供が劇を演じる。
	古市場		唐破風	内			休止。車輪を装置した舞台。子供が劇を演じる。
	石田町	布団みこし	布団（5段）	外	（2人）	締太鼓	
			唐破風	内			休止。車輪を装置した舞台。子供が劇を演じる。
	上中町		唐破風	内			休止。車輪を装置した舞台。子供が劇を演じる。
	本町		唐破風	内			休止。車輪を装置した舞台。子供が劇を演じる。30数年前に解体され、一部保存。
	下町		唐破風	内			休止。車輪を装置した舞台。子供が劇を演じる。
青垣町	寺内	ダンジリ	切妻	外	造り物		休止。
	中佐治		切妻	内		太鼓・笛(?)	昭和22～23年頃。
春日町	古河	太鼓神輿	布団（3段）		（4人）	太鼓(大)	
	野瀬		切妻	外	造り物		大正頃制作。
	鹿場	ふとん	布団（3段）	内	（4人）	太鼓(大)・鐘・鳴子	平成16年制作。
山南町	奥	子供太鼓	布団（3段）	外	乗り込んで太鼓をたたく人（2人）	太鼓（小）	昭和36年購入。
	若林	曳山	唐破風	内	造り物	締太鼓	明治12年（1879）建造。50年程前に休止という。
	和田	引き山	唐破風	車			約70年前の建

		（山車）					造。平成8年、中古で姫路より購入。
	小畑 西谷 山本 五ケ野 坂尻	曳山	未詳	未詳	造り物 寸劇		明治末期まで。大木を輪切りにした車輪の上に四畳半ほどの畳の間を作り、造り物をしつらえたり、寸劇をおこなったりした。
	久下地区	だんじり	未詳	未詳		三味線・太鼓	伊勢参りの出迎えの趣向として、造り物や素人芝居などとともにおこなわれた。
市島町	梶原	屋台	切妻	外			休止。解体して保存。大正頃まで祝い事に使用。
篠山市							
篠山地区	上河原町	鉾山 「三笠山」	切妻	車			寛文3年（1663）建造。
	下河原町	鉾山（チンチキヤマ） 「鳳凰山」	切妻	車	囃方（12～15人）	締太鼓・横笛・鉦	天保4年（1833）再調。
	上立町	鉾山 「孔雀山」	切妻	車	乗子（12人）	締太鼓・横笛・鉦	延宝5年（1677）建造。明治8年（1875）再調。
	下立町	鉾山 「高砂山」	切妻	車	乗り子（15人）	太鼓（中）・横笛・鐘	延宝2年（1674）建造か。昭和9年再調。
	呉服町	「剣鉾山」	切妻	車	囃子方（15人）	締太鼓・横笛・鉦	元禄3年（1690）寄進。昭和9年再調。
	上二階町	鉾山 「猩々山」	切妻	車	囃し方（10人）	太鼓（大）・締太鼓・横笛・鐘	貞享4年（1687）建造。
	下二階町	鉾山 「諫鼓山」	切妻	車	（10人）	締太鼓・横笛・鉦	昭和11年再調。
	魚屋町	鉾山 「蘇鉄山」	切妻	車	はやし手（10人）	太鼓（大）・横笛・鉦	貞享4年（1687）建造。明治3年（1870）再調。
	西町	「鏡山」	切妻	車			見返し、安政2年（1855）制作。

	和田	引き山	唐破風	車	（最大25人）	太鼓（大）・締太鼓・横笛・三味線	明治頃。
	大渕	ダンジリ	唐破風	車	乗り子（6人）	締太鼓・横笛・鉦	江戸時代。
	大上	ダンジリ					
	畑宮	太鼓山	切妻	車	乗り子（9人）	締太鼓・横笛・鉦	
	菅	ダンジリ					
	瀬利	ダンジリ（瀬利）	唐破風	車	乗子（4～8人）	太鼓・締太鼓・横笛・半鐘・三味線	明治頃。
		ダンジリ・船山（中村）					船形。
	今谷	船山	唐破風	車	乗子	太鼓（大）・半鐘	船形。
	奥畑	ダンジリ（曳き山）	切妻	車	乗子（15人）	大太鼓・締太鼓・横笛・三味線	明治頃。
	火打岩	ダンジリ					
	上宿	山車	切妻	車	乗り子	締太鼓・横笛・鉦	
	井ノ上	山車（ダンジリ）	切妻	車	乗り子（13人）	太鼓・横笛・鐘	明治初期。
	北嶋	山車（ダンジリ）	唐破風	車	乗子（12人）	締太鼓・横笛・鉦	
	畑井	やま・山車	切妻	車	乗り子（15人）	太鼓（大）・半鐘	船形。 江戸時代終り頃。
	宮ノ前		切妻	車			
	畑市	やま	切妻	車	乗り子（2人）	太鼓（大）・半鐘	明治頃。船形。
	小中	山車（ダンジリ）	切妻	車	乗り子（10～12人）	締太鼓・横笛・鉦	
	辻	山車（ダンジリ）	切妻	車	乗り子（9人）	締太鼓・横笛・半鐘	
	福住下	やま「亀甲山」	切妻	車	のり子（10人）	太鼓・横笛・鉦	江戸時代の終わり頃。
	杙木	「龍水山」					船形。 明治末に休止。
	福住中	ヤマ「獅子王山」	切妻	車	（10人）	締太鼓・横笛・鉦	
	福住上	山車「鶴寿山」	切妻	車	（10人）	締太鼓・横笛・鉦 鼓・大鼓・三味線・胡弓	
	川原	山車「菊水山」	切妻	車	（10人）	大太鼓・小太鼓・半鐘	船形。

	本明谷	やま「鳳凰山」	切妻	車	乗子（大人12人、子供10人）	締太鼓・横笛・鉦・三味線・胡弓	
	下原山	やま	切妻	車	造り物太鼓たたき（大人1人）	太鼓（大）	江戸時代の終り頃か。3年前より休止中。
	藤之木	造り山	切妻	車	造り物		明治頃。
	二之坪	山車	切妻	車	造り物		昭和初期。
	箱谷	造り山	切妻	車	造り物		
	小野新		切妻	車	造り物		
	小野奥谷		切妻	車	造り物		
	向井		切妻	車	乗り子（6人）	太鼓（大）	明治頃。
	杤梨		切妻	車	造り物		
	貝田	ダンジリ（造り山）	切妻	車	造り物		明治頃か。
	井串		切妻	車			
	細工所	やま（山車）	切妻	車	乗り子（8～9人）	締太鼓・横笛・半鐘・三味線	江戸時代。
	塩岡	山車	切妻	車	のり子（4人）	太鼓（大）	大正の初め。
	草ノ上	山車（やま）	切妻	車	のり子（12人）	締太鼓・横笛・鉦・三味線	明治頃。
	垂水	太鼓山	切妻	車	乗り子（4人）	太鼓（大）	
	小原				造り物		
	藤坂	造り山	切妻	車	造り物		
西紀地区	栗柄	山車（曳き山）	切妻	車	乗子（6人）	締太鼓・横笛・鉦	明治頃。
	川阪	鉾山、船山	切妻	車	乗り子（4人）	太鼓（小）・半鐘	船形。江戸時代。
	本郷		切妻	車			
	遠方	曳き山	切妻	車	囃子（8人）	締太鼓・横笛・三味線	大正頃。
	桑原	山	切妻	車	乗り子（10人）	締太鼓・横笛・鉦・三味線	明治頃か。
丹南地区	味間北		切妻	車			
	味間奥		切妻	車			
	味間南	引き山（ダンジリ）	切妻	車	乗り子（7人）	太鼓（大、小）・横笛・半鐘	明治頃。
	味間新	ダンジリ引き山	切妻	車	乗り子	太鼓（大、小）・横笛・半鐘	明治時代。
	真南条上	ダンジリ	切妻				休止。現存。明治の終わりから、大正の初め

							頃までは使われたか。
	真南条中	だんじり	切妻	車	乗り子（12人）	締太鼓・横笛	
	古森	ダンジリ	切妻	車	乗り子（5人、大人4人）	太鼓・横笛・半鐘	明治頃か。
	油井	ダンジリ	唐破風	車			

付記

篠山地区	波々伯部神社	お山（造り山）・胡瓜山	ケヤキ材の外車輪。中心を貫く柱（約7m）の頂部に松がつけられる。2.7mの方形の木枠台の周囲に竹で円錐形に枠組みが作られ、幕で覆われる。また、正面中央部に操り人形の舞台が開く。東西、2基造られ、東西の社役人によってそれぞれ組み立てられる。 波々伯部神社鳥居から拝殿前まで引き入れられ、舞台で、宮年寄によって、謡に合わせ人形戯が演じられる。

③-４-２　山～舁く

地区	自治会名	名称	屋根の形式	乗るモノの名称（人数）	楽器名	その他
丹波市						
柏原町	大新屋	太鼓	布団（3段）	乗り子（4人）	太鼓(大)	明治の初期頃。 姫路方面から購入。
	田路	太鼓	布団（3段）	乗り子（4人）	太鼓(大)	明治頃。
	東奥	太鼓みこし	切妻	乗子（4人）	太鼓(大)	江戸時代の後期か。
氷上町	常楽	御輿	唐破風			
	中央通	太鼓	布団（3段）	乗り子（4人）		昭和35年頃、加西市北条の黒駒(?)より購入。
	成松新町	ふとん	布団（2段）	乗子（4人）	太鼓	
	上町	太鼓・ミコシ	御輿屋根	のり子（4人）	太鼓(大)	明治頃。
	東町	太鼓	布団（3段）	乗り子？（4人）	太鼓	
	石生新町	太鼓御輿（正しくは屋台）	御輿屋根	乗り子（4人）	太鼓	文久元年(1861)。
	下新庄	太鼓	布団（3段）	乗り子（4人）	太鼓	昭和初期。
	清住	太鼓	布団（3段）	乗り子（4人）	太鼓	明治頃。
	福田	太鼓みこし	布団（3段）	乗り子（4人）	太鼓(大)	昭和31年頃。
青垣町	森	たいこみこし	唐破風	（子供4人）	太鼓(大)	昭和3年頃。
	沢野	おみこし	布団（3段）			
	東芦田	氏神御輿	（屋根なし）	（合計：大人2人、子供7人）	太鼓(大) 横笛	昭和20年頃、昭和60年頃。
		太鼓御輿	切妻			
		布団御輿	布団（3段）			
	大名草	太鼓	布団（5段）	乗り子（4人）	太鼓(大)	大正年間に谷川より購入。
	今出	触れ太鼓	（屋根なし）	（子供4～5人）	太鼓(大)	大祭当日村中を回り、

						大祭の始まることを太鼓を叩きながら知らせて回る。その年、おめでたい事が有った家の人達が門口に出て祝儀を渡したりなどする。
春日町	上ゲ町	太鼓山車	切妻	乗り子（4人）	太鼓(大)	
	芝町	ダンジリ	切妻	乗り子（4人）	太鼓(大)	
	小山	太鼓御輿	切妻	乗り子（4人）	太鼓(大)	明治初め頃。
	新町		切妻			
	西町	太鼓みこし	切妻	乗り子（4人）	締太鼓	
	杉ノ下	太鼓御輿	切妻	乗子（4人）	太鼓(大)	
	野村（代表区長）	太鼓みこし	唐破風	のり子（4人）	太鼓 締太鼓	昭和初期。
	奥野村	御輿	唐破風	（4人）	太鼓(大)	
	野上野	太鼓輿	御輿屋根	（4人）	太鼓(大)	
	上三井庄	おみこし	唐破風	乗子（4人）	太鼓(大)	明治39年頃。明治30年代はふとん御輿だった。
山南町	北太田		御輿屋根	造り物	太鼓(大)	
	太田	大人神輿	布団（3段）	乗り子（4人）	太鼓（大）	明治40年（1907）、高砂市宝殿から購入。嘉永元年(1848)以前の制作。
	谷川（代表区長）		布団			弘化4年（1847）、嘉永3年（1850）銘。 明治24年（1891）、西脇市黒田庄町喜多から購入。
	井原		布団			天保年間（1830～1844）の制作か。 慶応2年（1866）、高砂市曽根天満宮氏子より購入。
	奥	子供太鼓	布団（3段）	乗り込んで太鼓をたたく人（2人）	太鼓(小)	昭和36年購入。
	南中	子供太鼓	布団（5段）	（4人）	締太鼓	昭和50年、自治会有志で購入。
	和田	太鼓山	御輿屋根	乗り子（4人）	太鼓（大）	姫路市魚吹八幡神社氏子より購入。
	前川	太鼓	布団（3段）	乗り子（4人）	太鼓	
	草部	太鼓	布団（3段）	特にない（3人）	太鼓	明治26年（1893）、加西市戸田井より購入。
篠山市						
篠山地区	東新町	「あづま」	切妻			
	南新町	太鼓みこし 「南風」	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	平成8年新調。

	乾新町	太鼓みこし「いぬい」	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	昭和55年新調。
	上河原町	「三笠」	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	
	下河原町 小川町	「鳳凰」	切妻			
	上立町	太鼓みこし「高砂」	切妻	乗子（4人）	太鼓	
	下立町	太鼓みこし「孔雀」	切妻	乗り子（4人）	太鼓	
	呉服町	太鼓みこし「剣鉾」	切妻	囃子方	太鼓	
	上二階町	太鼓みこし「猩々」	切妻		太鼓（大）	
	下二階町	「諫鼓」	切妻			
	魚屋町 西町 西新町	「蘇鉄」	切妻			
	和田	太鼓山	切妻	（4人）	太鼓（大）	明治頃。
	大上	太鼓みこし				
	畑宮	太鼓山	切妻	乗り子（4人）		
	菅	太鼓みこし				比較的新しくつくられる。
	瀬利	太鼓山	唐破風	乗子（4人）		明治頃。
	奥畑	太鼓山	切妻	乗子（4人）		明治頃。
	日置	たいこやま（たいこ山車）	切妻	乗子（4人）	太鼓（大）	明治か、それ以前。
	春日江	太鼓山	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	明治か。
	泉	太鼓みこし	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	昭和60年。
	貝田	太鼓山	切妻	乗り子（4人）		明治か。
	福井	みこし・太鼓みこし	切妻	お囃子（4人）	太鼓（大） 締太鼓 半鐘	
西紀地区	宮田	太鼓御輿	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	明治6年。
	上板井	太鼓みこし	切妻	乗子（4人）	太鼓（大）	明治頃。
丹南地区	大山宮	太鼓御輿			太鼓	現存せず。
	大山上	太鼓御輿				昔あった。
	大山下	太鼓御輿			太鼓	現存せず。
	西古佐	太鼓山	切妻	乗り児（4人）	太鼓（大）	明治頃。
	味間北	太鼓山	唐破風	（4人）	太鼓（大）	
	味間奥	太鼓山	唐破風	（4人）	太鼓（大）	
	味間南	太鼓山	唐破風	乗り子（4人）	太鼓（大）	明治頃。
	味間新	太鼓山	唐破風	乗児（4人）	太鼓（大）	明治。
	中野	太鼓山	切妻	（4人）	太鼓（大）	
	大沢	太鼓やま	切妻	のり子（4人）	太鼓	近代。
	弁天	太鼓山神輿	切妻	乗り子（4人）	太鼓	昭和40年頃。
	大沢新	太鼓御輿	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	大正頃。
	杉	太鼓御輿	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	大正頃。

	野中		切妻			昭和61年。
	真南条上	太鼓	切妻	乗り子（4人）	太鼓（大）	
	波賀野	太鼓山	唐破風	乗子（4人）	太鼓（大）	
今田地区	今田町 上小野原	太鼓御輿	布団（3段）	乗子（4人）	太鼓	昭和26年に始まり約20年余り続いて来たが、若者の減少によって、かき手不足となり昭和45年、中断。

③-５　盆踊り

・現行欄に「○」があるものは、現在、盆踊りが当該地区で現在も行われていることを示す。

・開催時期・開催場所で「→」があるのは、ある日時・場所から、矢印の日時・場所へ変更があったことを示す。　例）「不動尊堂前→公民館」：不動尊堂前から公民館へ場所が変化した。

・休止時期は、当該地区で盆踊りが休止・中止された時期を示している。一部地区に、現行とされているにもかかわらず休止時期の記入があるが、そのままの記述とした。

・音頭名は、アンケートに記載されている記述を用いた。　例）「七つ音頭」（「天田音頭」とも）と総称される音頭は、アンケートでは「七っこ音頭」「七ツ」「七々ツコ」「七つ踊り」「七つおどり」等と様々に表記されているが、表記を統一することはしない。

・音頭取りの内、「地区内」は、地区内の音頭取りの有無あるいは具体例、「外部への依頼」は、音頭取りを外部へ依頼することの有無あるいは具体例を記述している。個人名が特定される場合は、姓の頭文字だけを表記した。　例）丹波太郎氏→Ｔ氏

自治会名	現行	開催時期	休止時期	開催場所	音頭名	楽器	音頭取り	
							地区内	外部への依頼
丹波市　柏原町								
屋敷		7月末	平成16年	郡民会館	柏原音頭 さえもん音頭	太鼓	住民	
本町		8月お盆頃	20数年前	地区内広場	柏原音頭	テープ		
挙田	○	8月16日		不動尊堂前→公民館	柏原音頭 さえもん音頭	太鼓 三味線		柏原おどり保存会
大新屋	○	8月13日～14日		小学校	柏原音頭	太鼓 三味線		踊り保存会
鴨野		8月24日	平成元年頃	公民館運動場	柏原音頭 さえもん音頭	テープ	長老。太鼓のみ。	
北山	○	8月20日	昭和28年頃	作業場広場（旧農協前）	さえもん音頭他	太鼓 三味線	音頭とり	ある
田路	○	8月20日～24日（地蔵盆に行っていたが最近		公民館広場	七っこ音頭（昭和60年頃迄）→さえもん音頭	太鼓	グループコスモス	柏原おどり保存会

		は日曜日）						
南多田	○	8月5日		公民館グランド	柏原おどり さえもん音頭	太鼓 三味線		柏原おどり保存会
東奥		8月13日～15日の1日のみ	平成10年頃	東奥運動場	江州音頭 柏原音頭 さえもん音頭	太鼓 三味線	N氏	ある
上小倉		8月14～8月15日	昭和30年代	公民館	さえもん音頭 黒井踊 七々ツコ	太鼓 三味線		ある
見長	○	8月最終土曜日		公民館広場	さえもん音頭	太鼓 三味線		柏原踊り保存会
小南		7月下旬	昭和の末頃	公民館	さえもん音頭			ある
地域名無記入		8月14日	平成5，6年頃	お宮	黒井音頭	太鼓		
丹波市　氷上町								
西中西	○	8月13日		平成18年は、文化センター		太鼓	歌の好きな方	
西中南		8月13日	平成10年頃	文化センター駐車場	江州音頭 さえもん音頭	太鼓	長老	
常楽・上町中央通・成松新町・東町	○	8月23日～24日	平成13年頃	中央小学校校庭	建前の時の歌 → さえもん音頭 七ッ 江州音頭	太鼓	年長の男性素人の上手な人	音頭を知っている人
石生新町		8月14日～16日	昭和40年代後半	公民館広場	播州音頭 江州音頭 さえもん音頭	太鼓	地域の長老	氷上町内の人
南町	○	8月13日		区内広場	さえもん音頭	太鼓	地区内の人3名	
大崎	○							
横田			昭和45年頃					
下新庄		8月14日	30年前	運動場	さえもん音頭	太鼓	地元の有志	
上新庄		8月15日	40～50年前	小学校	播州音頭 さえもん音頭	太鼓	地区の方	
清住		8月？日	不明	神社近くの広場				
三方		8月18日→14日	昭和30年代半	寺→公民館	さえもん音頭	太鼓	区内の年輩者	
中野		8月のお盆	昭和60年代のみ行	小学校校庭	江州音頭？	太鼓 三味線	男性	ある

			われる					
三原		8月12日～13日	平成10年頃	公民館広場	さえもん音頭 七つ踊り	太鼓	集落内の先輩	
大谷		8月上旬～8月中旬	昭和45年頃	小学校校庭	さえもん音頭 福知山音頭	太鼓	有志	
稲畑		8月15日	60年ほど前迄？	お寺など	さえもん音頭 ？	太鼓	不明	谷村や葛野地区の人
谷村		8月？日～24日	昭和50年代	グラウンド	さえもん音頭 七つ踊り	太鼓	地区内の長老	
佐野		8月12日～15日	昭和20年代後半	公民館広場	福知山音頭 さえもん音頭	太鼓 笛	区内の愛好家	
絹山			不明					
伊佐口		8月13日～15日	昭和40年頃	部落運動場		太鼓		
日比宇	○	8月13日～15日		正覚寺境内	さえもん音頭 七つ踊り 福知山音頭	太鼓	音頭を知っている地区内の人	隣接する村の好きな方
小谷			10年ほど前（公民館行事としておこなうが継続せず）					
北御油		8月のお盆の時期	平成3年	グラウンド	氷上町音頭 さえもん音頭	太鼓	地区内の者	ある（記録がなく不明。年度により異なる。）
氷上		8月13日～15日	昭和33～35年頃	公民館広場	さえもん音頭等	太鼓		
南油良		8月13日	昭和30年頃	公民館広場	さえもん音頭等	太鼓	任意	
北油良		8月	昭和30年頃	神社横広場		太鼓	長老	香良の人
桟敷		8月17日～18日	4～5年前	運動場		テープ		
丹波市　青垣町								
中町		8月13日～24日	昭和60年頃	公民館 地蔵堂前広場 小学校校庭	佐治音頭（戦後～昭和50年まで） さえもん音頭 七つ踊り	太鼓	有志二人	遠阪杉谷のＡ氏（故人）
上町			昭和40年代					
大正町		7月29日～8月31日	昭和30年頃	旧県道神楽橋より足立石油店まで	福知山音頭 さえもん音頭 佐治音頭 七つおどり	太鼓		沢野のＫ氏・Ｙ氏 杉谷のＡ氏

森		8月16日	25年前	公民館前の広場	さえもん音頭	太鼓	音頭取の人をたのんでいた	大名草の人（故人）
沢野		8月14日	昭和50年頃	お寺	さえもん音頭	太鼓		
東芦田		8月24日	昭和50年頃	地区の運動場	さえもん音頭	太鼓	盆踊り実行委員	
口塩久	○	8月14日～15日（年により行う）		公民館広場	播州音頭 さえもん音頭	太鼓	住民	
桧倉		不詳	古老から話を聞くくらい。					
大名草	○	8月14日		大名草公民館前広場	さえもん音頭（曲目変化あるが不詳）	太鼓	タイコクラブ	
大稗	○	8月15日～16日		集会所		太鼓 テープ		
小稗		8月14日	昭和60年頃	運動場	さえもん音頭	太鼓	年輩者	
惣持		8月12日～24日	昭和50年頃	公民館	江州音頭		テープ	
稲土		8月14日	昭和50年頃	稲土運動場及び西山の広場	さえもん音頭			ある
杉谷	○	中佐治夏祭り→8月初旬		中佐治区グランド	さえもん音頭 七つ踊り	太鼓	住民	
中佐治	○	8月		中佐治中央グランド				
徳畑		8月15日	平成10年頃	運動場		太鼓		ある
遠阪		8月23日	昭和50年頃	自治会グランド	さえもん音頭		年輩者等	杉谷のＡ氏
丹波市　春日町								
黒井（代表区長）	○	8月14日～24日頃		各地区（人数も少なく狭い場所で行われている）	黒井音頭 左衛門音頭	太鼓 三味線（今はほとんどがテープ）		昔は名手、今は保存会
上ゲ町	○	8月16日（雨天の場合は翌日）		上ゲ町地内、地蔵堂附近	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓 三味線（現在はテープ）		黒井おどり保存会
横町		8月24日	昭和32年	当時の区	黒井音頭	太鼓・三	専内の方	

			頃	の中心部		味線		
芝町	○	芝町祭り：8月第3日曜日 地蔵盆：8月24日		芝町祭り：商店街中芝駐車場 地蔵盆：お地蔵様横(私地)	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓・三味線（10年ほど前まで）→テープ	テープ	小山区のH氏
小山	○			小山自治会広場	黒井音頭			
本町		8月13日～24日	昭和45年頃	各自治会道路	黒井踊り さえもん音頭	太鼓 三味線 尺八		保存会の人
仲町 西町 杉ノ下	○	8月24日		西町公民館前	黒井踊り さえもん音頭	太鼓 三味線 尺八 太鼓	O氏 地元踊り保存会	
野村（代表区長）	○	8月13日～24日		神社→地蔵堂前→公民館	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓 三味線 尺八等	地区の長老	春日おどり保存会
奥野村	○	8月14日～24日	40年前位	神社	黒井音頭 さえもん	太鼓 三味線 尺八	男性	
西野々	○	お大師さん（弘法大師）の日→8月第3週	一時中断し、平成8年から再開	通称、お大師さん（極楽寺境内）	山科音頭 音頭取りの持ち歌	ナシ	昔は、青年団などの古老で音頭に長けた方	主に京都府で当地区から園部町界隈までで、相互に交流があった。
平松	○	8月13日		地区内のグランド	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓	地区の長老	
大野		8月17日	昭和35年頃	公民館前広場	黒井踊り		地域内の人、又はテープ	
古河	○	8月13日～14日		公民館前広場	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓	高齢者	かつては依頼していた。平成18年に初めて黒井踊り保存会に依頼。
多利	○	8月31日		阿陀岡神社	黒井音頭 福知山音頭 さえもん音頭	太鼓 三味線	春日踊り保存会に依頼	春日踊り保存会
小多利	○	8月21日（大師堂のおまつり）	昭和60年頃	大師堂前広場	江州音頭	太鼓	地区の音頭取り	春日部地区の人
七日市	○	8月14日		地区運動場	さえもん音頭	三味線		春日踊り保存会

野上野	○	8月24日→24日に近い前の土曜日		桂谷寺駐車場（赤山大明神を祭る赤山祭として）	黒井音頭 さえもん音頭 (福知山音頭)	太鼓	S氏	春日踊り保存会、谷垣氏
中山	○	8月13日～15日		公民館広場	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓	地区民	国領のK氏
松森		8月13日～14日	不明	天満宮	？	太鼓	集落の住民	
野瀬	○	8月7日～25日		神社、センター、グランド	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓 三味線	区民	
上三井庄	○	8月13日→14日、15日		東新寺の広場→三宝ダム広場	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓	区の中で何とか習い伝えている	昔は、下三井庄のI氏
下三井庄	○	8月12日～20日→土、日にあわせる		一宮神社境内	黒井音頭 さえもん音頭	大太鼓	公民館活動の一環として伝承活動をしている(音頭とり4人・太鼓3人)	
鹿場	○	8月15日		秡浄山常楽寺境内	黒井音頭	三味線 太鼓	村内区住民	黒井踊り保存会
東中	○	8月10日～15日→土、日にあわせる		区公民館	黒井おどり さえもん音頭	太鼓	区内	おどり保存会
棚原	○	8月14日～8月15日	昭和40年前半頃に中絶	神社境内→区民広場	さえもん音頭	太鼓	区内の有志	
柚津	○	8月13日～17日→上記内の日曜日		区のグランド	黒井音頭 さえもん音頭	太鼓	区民	
石才	○	8月14日（2年間に1度の開催となった）	昭和30年頃	石才バス停前（昭和30年頃迄）→公民館	黒井音頭 さえもん音頭		U氏	
丹波市　山南町								
上滝	○	8月14日		集会センター	山南おどり 江州音頭 デカンショ	テープ		
下滝		8月	昭和35、6年頃					
北太田	○	8月13日～		公民館前広場	山南おどり 丹波ささ山	太鼓 CD	W氏	

太田	○	自治会夏祭り：8月13日 子供会盆踊り：8月23日		自治会：大歳神社境内（50年以上前）→自治会グランド 子供会：お寺の境内	デカンショ節 江州音頭 河内音頭 炭坑節 福知山音頭（10年くらい前まで） さんなん踊り	テープ	昔は2人位いた。今は全てテープ。	
池谷	○	8月5日～10日		谷川駅前				
長野	○	8月13日		長野児童公園	供養おどり	テープ		
玉巻		8月1日～15日	不明	公民館	山南おどり			
金屋		8月14日（お盆の夏祭り）	平成3年	公民館前広場→公民館グランド	山南おどり 三田踊り 炭坑節 福知山音頭（昭和60年まで）	太鼓	音頭とりを依頼、その後テープ	深田のM氏
奥	○	8月第2日曜日（奥夏まつり）		お大師さん広場→地区公民館広場	三田踊り（昭和36年頃まで） →山南踊り	太鼓→テープ	地域の歌の上手な人	K氏・H氏。両氏共故人。
南中		7月24日～（地蔵盆の折〔時々〕）	平成15年	遊び場	三田音頭 山南音頭	テープ		
若林		8月13日	昭和60年頃	公民館	いろいろ	テープ	テープ	
小野尻		8月13日～15日の間の一日	昭和25年頃（正確には不明）	自治会運動場	近年はステージを造り素人の演奏等を観賞			
小畑	○	8月第3土曜		寺の境内	江州音頭 河内音頭 大師音頭（地蔵菩薩建立以後） 和田音頭 福知山音頭（昭和30年頃）	太鼓 三味線 ギター		大阪秋月会
西谷	○	8月12日～25日の土曜日		寺の境内	河内音頭 山南音頭 和田音頭（昭和24年頃まで）			プロ
山本	○	8月19日～26日→地蔵盆に近い土曜日		延命寺境内	江州音頭			本職

和田		8月1日～15日	昭和50年代前半	お寺・小学校	山南音頭 三田音頭 山南踊り	太鼓	歌い手	ある
小新屋		8月15日	昭和50年代	グランド	江州音頭 山南音頭 和田音頭（昭和30年代まで）	ナシ	テープ	
前川		8月12日～15日	約40年前	グランド（薬師堂前）	和田音頭 山南音頭		歌う人だけで音頭はとっていなかった	
北和田	○	8月14日		明光寺	さんだん踊り 山南踊り 親らん踊り	テープ	テープ	
草部		8月13日～15日	平成15年	公民館広場、グランド	山南音頭等	テープ		
丹波市　市島町								
安下		8月20日以降	昭和36、7年頃	公民館グランドまたは道路の辻	福知山音頭	テープ		
大森		8月15日～23日	昭和30年頃	一宮神社境内	福知山音頭		町内の歌い手	
新道貝		7月末～8月初め頃の1日	昭和50年頃	公民館広場	福知山音頭 市島踊り 竹田踊り	テープ		
水西		8月14日～16日	昭和30年代初	小学校校庭		太鼓		
表		7月21日	1980年代	お寺の境内	福知山音頭 市島音頭 竹田踊り	太鼓	地区の人	
中村		8月23日	昭和58年頃	公民館前広場	福知山音頭等	テープ		
大杉		8月10日～24日	昭和30年代	地蔵さんの広場付近	福知山音頭が主流	太鼓	唄の上手な人	
宮ノ下		8月12日～24日（上記のうち2回ぐらい）	昭和25～30年頃	お寺	福知山音頭 竹田音頭	太鼓	決まった人はいない	
八日市		8月	昭和20年代後半	公民館前	福知山音頭	太鼓	不明	
梶原	○	8月13日		区公民館付近（納涼大会を兼ねる）	市島音頭			
上垣		8月17日	昭和35年	お寺やお	さえもん音頭	太鼓が	地区の音頭	

		～24日	頃	宮の境内	黒井踊り →福知山音頭	主、時々 三味線	とり	
南	○	9月1日直近の土曜日		知乃神社境内	さえもん音頭	太鼓	地区内の2名、テープ	
戸坂	○	8月14日		戸坂ふれあい広場	市島音頭	テープ		
白毫寺		8月15日	昭和45年頃	区グラウンド	福知山音頭	太鼓		
酒梨	○	8月24日		公民館ふれあい広場	酒梨音頭	テープ	酒梨コーラス	
勅使		8月18日	昭和30年頃	法泉寺	福知山音頭 さえもん音頭	太鼓	長老	
篠山市　篠山地区								
北新町	○	8月15日～16日		市民グラウンド→三の丸広場	デカンショ節	三味線 太鼓 笛		
乾新町	○			広場	デカンショ節	太鼓 三味線 尺八等		
上河原町		8月15日～16日		河川、集会所前広場など	デカンショ節		自治体	
上二階町		8月～	昭和27年頃	駅前広場、学校運動場、街路	デカンショ音頭 福知山音頭	三味線 太鼓	地域の特定の人	
魚屋町	○	8月15～16日		城北公園	デカンショ節	三味線 太鼓		保存会
小多田三	○	8月盆の前の日曜日		自治会児童公園	デカンショ節	太鼓 三味線		デカンショ節保存会
八上下		8月15日						
和田		8月14～15日						
畑宮	○	8月中旬		小学校	デカンショ節	太鼓 三味線		
奥畑		8月10日～20日	昭和27～28年頃	寺院前の広場	江州音頭	三味線	旧篠山町の郷土芸人、または旧村内の人	旧篠山町の郷土芸人
東岡屋			一二度行われた					
入組	○	8月20日～21日		小学校	デカンショ	太鼓 三味線 かね	自治会・小学校PTA	

上宿	○			小学校グランド	でかんしょ節 城東音頭(廃絶)			
井ノ上	○	8月19日		小学校運動場	デカンショ節	太鼓 三味線		
北嶋		8月10日～8月28日	昭和40年頃	波々伯部神社広場、北嶋厳島神社近くの広場	播州音頭	太鼓 三味線		日置地区の人
畑市	○	8月19日～うら盆		日置小学校グラウンド	さえもん音頭・江州音頭→デカンショ音頭	太鼓 三味線 笛	定かでないが町の有力者	
辻		8月20日～28日	不明	バス停留所の広場→公民館	さえもん音頭 デカンショ節	太鼓 一部三味線	総代	ある
曽地中		8月15日～24日	不明	お寺	江州音頭		地区内の歌の上手な人	
野々垣		8月13日～15日	不明	公民館		太鼓 三味線	青年団	
後川上ノ東	○	8月10日～16日		学校の運動場	デカンショ節	三味線	地域のサークルの人達	
後川上ノ西		8月15日	昭和38年頃	後川小学校運動場	江州音頭	太鼓	地元の有志	
後川下	○	8月5日→8月上旬の土か日曜日	不明	後川小学校	デカンショ音頭 みつ節（廃絶）	太鼓 笛等	唄の会	ある
泉		8月10日	不明	神社境内	デカンショ 江州音頭	太鼓	地区の音頭の達人	
福住下		8月24日	不明					
福住上	○	8月		公民館	デカンショ節		地区内の人	
川原	○	8月10日～20日		お寺		太鼓	長老	
本明谷		8月	不明	公民館	江州音頭		地元の人	
安口東		8月15日～24日	昭和40年頃		山科音頭		Y氏（故人） T氏（故人）	
下原山		8月14日～17日	不明	大日堂→日吉神社	伊勢音頭・山科（昭和初期）→デカンショ音頭		当時の副区長	近くの地区から数名
二之坪		8月20日	不明	熊野神社	江州音頭		地域の歌い手	近隣の方
向井		8月頃	不明	集落の広場	江州音頭		地区外の人	ある

細工所		8月	不明	集落内の空地	播州音頭		有志（昔の経験者が主）	
塩岡		8月上旬	不明	小学校グランド	デカンショ			
草ノ上		8月7日～24日	不明	神社の境内	江州音頭	太鼓 三味線	有志	
垂水		8月1日～24日	不明	小学校・神社	江州音頭	太鼓	地域の音頭に秀でた人	
小立		8月15日	不明	地区内地蔵前	デカンショ			
山田			不明	清滝山の上				
小田中		8月15日～18日	昭和30年代	神社	江州音頭	太鼓 三味線		
福井	○	8月		区内の広場	現在はカラオケ大会に変わった			
藤坂		8月15日～	約10年前	長谷寺境内→藤阪公民館前広場	江州音頭 伊勢参り歌等	太鼓	地元の得意な人数名	
市野々		8月15日～24日	不明	久昌寺・神社			集落住民	
篠山市　西紀地区								
黒田		8月15日	不明	公民館広場	デカンショ さえもん音頭	太鼓 三味線	地元の人	他町の音頭取り
上新田	○	（詳細未記入）						
東木之部		8月12日～15日	不明	公民館前	福知山音頭・江州音頭（昭和50年頃まで）→デカンショ節	太鼓 カネ	区長ないし音頭取りの上手な人	
川西		8月13日	不明	公民館	西紀音頭 デカンショ音頭	太鼓 三味線	選間の人	
宮田	○	8月12日		西紀支所駐車場	にしき音頭		テープ	
上板井		8月10日～20日	不明	公民館の広場	福知山音頭		心得のある長老	
小坂		8月	不明	神社	不明	ナシ	不明	
垣屋		8月24日	不明	公民館	デカンショ節	テープ	地元住民	
高坂		8月14日～20日	不明	広場→公民館前			N氏	M氏
倉本		8月15日頃	昭和25年頃	公民館らしい				
栗柄		8月14日～15日	昭和34年頃	小学校校庭	さえもん音頭 江州音頭	太鼓		桑原のT氏 垣屋のM氏

遠方	○	8月盆	昭和の終り頃		さえもん音頭			
桑原	○	8月19日→20日前後の土曜日		自治会内広場	さえもん音頭 江州音頭	太鼓	住民	
篠山市　丹南地区								
追入		8月	不明					
大山宮		8月18日	不明	追手神社境内	江州音頭 河内音頭 デカンショ節		有志	篠山の人
一印谷		8月13日～8月末日	昭和25年頃	神社、阿弥陀堂、公民館前広場など、毎年持ち回り	デカンショ節、他		長老、唄自慢の人等	
町ノ田		8月24日	不明	町ノ田運動場				
長安寺		8月22日	不明	運動場	デカンショ節			
大山下		8月中旬→夏祭りに変じ、8月20日をすぎた最初の日曜日	不明	境内→公民館前広場	デカンショ	太鼓 笛	地元の有志	
東吹下		8月	昭和30年	河川敷、他（青年団主体）	さえもん音頭→江州音頭	三味線		他地域の優れた人
網掛		8月7日	昭和の終り頃	公民館の広場	デカンショ踊り	テープ		今田町のＦ氏
西吹		8月初旬	不明	公民館広場	デカンショ節		テープ	
西古佐		8月10日～20日	不明	駅前広場→公民館前広場	デカンショ節	三味線	同好会有志	
味間北		8月10日～15日	不明	公会堂前グランド	でかんしょ		住民	
味間南	○	8月上旬の日曜日（2-3年に一度）		地区、公民館、グラウンド（新旧住民交流として）	デカンショ節	太鼓 三味線		デカンショ節保存会

住吉台	○	8月19日		住吉台公園			テープ等	ある
岩崎	○	8月24日～26日		公民館前広場	デカンショ節		テープ	
真南条上			幕末～明治初期にはおこなわれていた	庄屋の庭				
真南条中		8月10日～20日	不明	公民館前広場	播州音頭		音頭とり	
古森		8月初旬～中旬	不明	公民館前広場	福知山音頭	太鼓 三味線	地域の人	専門家
油井	○	8月10日～15日		民家の前庭→油井地区運動場	始まりが篠山音頭（さえもん音頭）、次に黒井音頭、しめくくりは播州音頭	太鼓	音頭とり	ある
不来坂		8月10日～15日	不明	地区内				
古市	○	8月24日		古市駅前又は古市公民館	デカンショ節 播州音頭 江州音頭	太鼓 三味線		音頭とり専門の人・民謡クラブ
波賀野新田		8月24日	不明	秋葉神社境内				
南矢代		7月20日～8月30日	昭和30年頃	分教場	播州音頭	太鼓 三味線 笛		播州から来ていた専任者
篠山市　今田地区								
今田町本荘		8月14日	不明	公民館広場	デカンショ	太鼓	地元有志	
今田町佐曽良新田		8月13日～16日の間に	平成5、6年頃	地区内の適当な空地等	デカンショ			あちこちで音頭をとっていた人
今田町木津		8月13日	不明	コミセン前広場	播州音頭 デカンショ節	太鼓	村の長老	
今田町四斗谷		8月	不明	個人宅の庭	福知山音頭		レコード	
今田町上小野原	○	8月13日～14日		公民館駐車場→上小野原広場	播州音頭・江州音頭（昭和32年頃まで） →デカンショ・篠山音頭（さえもん音頭）	締太鼓 三味線	地元自治会の人	地区外の音頭取り

今田町下小野原		8月	昭和40年頃	地区内にある広場	不明	ナシ		
今田町上立杭		盆前→8月12日	昭和40年頃	地域の広場（個人の屋敷跡地）→道路の広いところ	デカンショ 近江音頭 さえもん	太鼓	上手な人	
今田町釜屋	○	8月5日		地蔵堂前→釜屋農業倉庫前	デカンショ音頭			

④　祝福芸　三番叟

地区	自治会名	呼称	場所	時期
		内容（役名・曲目・由緒等）		
丹波市				
氷上町	上新庄	式三番叟	天満神社	10月9日、10日
		小謡4～5人、かげ打1人、囃子方（小鼓1人、笛5人）、地謡。 千歳・翁・三番叟。 明治中期に、稲畑から伝授をうけたという[(a)]。		
	稲畑	稲畑式三番叟	稲畑奴々伎神社	10月第2週日曜日
		二番叟（侍烏帽子・扇子）、翁（狩衣姿で白式尉の面）、三番叟（剣先烏帽子・扇子）、囃子方、後見。 千歳・翁・黒式尉。 約160年ほど前にはじまったという。		
	佐野	佐野式三番叟	矢降神社	10月10日
		千歳・翁・黒式尉、楽屋方、口上方。 戦後一時中断したが、近年復活した[(a)]。		
青垣町	寺内	翁三番叟	八幡神社	10月体育の日の前日
		舞人3人、はやし方5人（笛・鼓・拍子木）、地謡方2人。 千歳・翁・父尉・黒式尉。		
篠山市				
丹南地区	追入	子供三番叟	追入神社	10月8日
		延年の舞・万歳楽・鈴の舞。 伴奏は、拍子木のみ。人形操りの形が入る。 現丹波市の八子太夫が伝えたとも、阿波の旅芸人が伝えたともいう[(a)]。		

(a)　兵庫県教育委員会編『兵庫県の民俗芸能――民俗芸能レッドデータブック――』（兵庫県教育委員会、１９９７年）
(b)　丹南町史編纂委員会編『丹南町史』（丹南町、１９９４年）

⑤　人形戯

地区	自治会名	呼称	場所	時期
		内容（役名・曲目・由緒等）		
篠山市				
篠山地区	（波々伯	祭礼操り人形	波々伯部神社	8月5日（3年毎）

	部）	お山（造り山）の舞台で、神社の宮年寄（歌い手12名・繰り手数人）が、謡に合わせ操り人形「デコノボウ」12体（刀・弓矢・小道具を人形が持つ）を操り演じる。 芸能担当は、宮年寄11人、造り山担当は、社役人13人（お山保存会）。		
丹南地区	町ノ田	池尻人形狂言	池尻神社	10月8日
		宝暦4年（1754）池尻神社遷座千百年記念に奉納された「神変応護桜」を演じる。 役名：じじ・ばば・八重垣・稲田姫・ネギ（人形）		

⑥　寺院の芸能

地区	自治会名	呼称	場所	時期
		内容（役名・曲目・由緒等）		
丹波市				
山南町	谷川	鬼こそ（鬼追会式）	常勝寺	2月11日
		法道仙人役1人（御幣を持つ）、鬼役4人（松明・鉾・刀・錫杖を持つ）。 四匹の鬼が、餅切り、火供え、火合わせ、をおこなったあと、太鼓・法螺貝・鐃・鉦などを打ち鳴らし続ける中、法道仙人に導かれて縁を回る[(a)]。		

(a)　兵庫県教育委員会編『兵庫県の民俗芸能――民俗芸能レッドデータブック――』（兵庫県教育委員会、１９９７年）

⑦　その他の芸能　芝居・ニワカ・歌謡等

地区	自治会名	呼称	場所	時期
		内容（役名・曲目・由緒等）		
丹波市				
青垣町	今出	裸祭り	熊野神社	11月3日
		熊野神社の加護を願う人、加護を受けた人たち（神子（みこ））が、かけ声をかけながら、裸で本殿と舞堂の間を七回半駆け足で往復する。舞堂、本殿では肩を組み飛び上がる所作をおこなう。もとは、氏子の内、15歳になったものがおこなった。		
春日町	棚原	相撲甚句	神社	10月10日前後の日曜（秋祭り）
		役名：化粧まわしをつけた力士6人（2人が相撲甚句を唄い、残りが拍子木を打つ） 甚句を歌い上げるとき片手に白扇を持つ。相撲甚句は、季節を織り込んだ甚句と郷土の著名人や特産物を織り込んだ甚句の2種類がある。 化粧まわしは、大正時代にプロの力士が当区に巡業に訪れた際、物々交換で得たものという。昭和25年頃まで行われていたが、中断し、平成5年から復活。		
山南町	小野尻	素人芝居		
		詳細未詳		
	久下地区	素人芝居		
		伊勢参りの出迎えの趣向などとしておこなわれた。		
篠山市				
篠山地区	前沢田 北沢田	鱧祭	前沢田公民館 北沢他公民館 （元は祷家（とうや）宅）	10月第2週の土曜日 （元は10月16日、17日）
		役名：村役人・接伴人（羽織袴、鱧切り・杖持・踊子・祷家・助人・猿田彦（麻上下着用）、スッテンテン（子供：白衣袴） 昔沢田は字のとおり沼田であり、その中に大きな蛇が住んでいた。村人は毎年大切な長男を順にスッテンテンと呼んで生贄に出していた。この蛇を退治する神があらわれ、蛇を退治してくれた。その蛇を退治する所作をおこなう。また、「白楽天」「難波」		

		の謡がある。		
	篠山地区	デカンショ踊り		デカンショ祭りを中心として、各行事に出演
		地方：三味線・尺八・篠笛・太鼓・唄・おはやし（7～8人） 形態：流し踊り、輪踊り、盆踊り 昭和26年篠山民謡保存会、昭和33年篠山デカンショ節保存会が結成され、現在、会員数70名。		
	福住上	水無月祭打込囃子	山車又は、神社拝殿	７月の最終日曜日
		太鼓・大鼓・小鼓・三味線・胡弓・笛等を用いた囃子。 地元出身の大阪文楽座座員 竹本住惠太夫（遠山宗九郎満直：明治35年〔1902〕没）が中心となって、6台の山それぞれに打込囃子を作詞作曲した。天保年間（1830～43）頃に取り入れられたともいう。 後継者難から10年余り途絶えていたが、平成18年、民間団体の助成を契機に復活した。 →風流・山も参照。		
	貝田	唱語		
		太鼓を用いる。		
丹南地区	東吹下	ニワカ	神社舞堂	10月16日（秋祭りの日）
		青年団によるニワカ。 現在はおこなわれていない。		

参考文献

小林米蔵編集代表『篠山町七十五年史』（篠山町役場、１９５５年）
松井拳堂編『柏原町志』（町志編纂委員会、１９５５年）
畑正義編『春日町誌』（春日町誌編纂審議会、１９５９年）
青垣町編『青垣町誌』（青垣町、１９７５年）
柏原町編『柏原町誌』（柏原町、１９７５年）
氷上町誌第一巻編集委員会編『氷上町誌』第一巻（氷上町誌第一巻編集委員会、１９７５年）
喜多慶治『兵庫県民俗芸能誌』（錦正社、１９７７年）
篠山町史編集委員会編『篠山町百年史』（篠山町、１９８３年）
西紀町史編纂委員会編『西紀町史』（西紀町、１９８７年）
山南町誌編纂委員会編『山南町誌』（山南町、１９８８年）
丹南町史編纂委員会編『丹南町史』（丹南町、１９９４年）
丹波文化団体協議会編『丹波の祭と民俗芸能』（神戸新聞総合出版センター、１９９６年）
兵庫県教育委員会編『兵庫県の民俗芸能―民俗芸能レッドデータブック―』（兵庫県教育委員会、１９９７年）
兵庫県民俗芸能調査会編『ひょうごの民俗芸能』（神戸新聞総合出版センター、１９９８年）
氷上郡教育委員会編『氷上郡民俗芸能調査：柏原町指定文化財大新屋新法師踊り』（氷上郡教育委員会、１９９８年）
氷上郡教育委員会編『氷上郡民俗芸能調査：常勝寺鬼こそ・佐野の式三番叟』（氷上郡教育委員会、１９９９年）
氷上郡教育委員会編『氷上郡民俗芸能調査：青田の神楽・今出熊野神社裸祭り』（氷上郡教育委員会、２０００年）
氷上郡教育委員会編『氷上郡民俗芸能調査：稲塚風流踊り・稲畑式三番叟』（氷上郡教育委員会、２００２年）
氷上郡教育委員会編『氷上郡民俗芸能調査：中野奴踊り』（氷上郡教育委員会、２００４年）
藤本幸男『丹波市内の太鼓台―ふとん太鼓台を中心に―』（藤本幸男、２００６年）

お　わ　り　に

報告書にもまとめたように、兵庫県の丹波地区には獅子神楽、田楽、人形戯、翁舞をはじめとする多くのジャンルの民俗芸能が伝承されている。特に、篠山市宮ノ前の波々伯部神社のお山の神事や、今田町上小野原の住吉神社の神舞、同町木津の住吉神社の田楽などは、中世の京都で誕生した芸能が伝えられたものである。長い歴史の中で、丹波の人たちの手で現在まで伝えられ、育てられて来たのである。

丹波市には、シンボチ踊りなどの風流踊りが柏原町、氷上町に分布している。すでに伝承が途絶えたものが、青垣町、春日町、今田町にあるので、このような中世末から近世初頭に流行した風流踊りは丹波地域に広く分布していたことになる。その他、三番叟をはじめとする近世に発する民俗芸能が丹波には多数残されているのである。まさに、丹波地域は多種類の民俗芸能が残る「宝石箱」である。

こうした民俗芸能が、一部の識者や関係者にはよく知られていたが、多くの人々の支援を受けて伝承されているかといえば、課題が多い。今回の調査の目的は、丹波地域に伝承されている民俗芸能の現状を把握し、今後の保存・活用・継承の基礎資料にするところにあった。

そのために、今回の報告書では周知の民俗芸能だけではなく、調査の対象として取り上げられることの少なかった「盆踊り」や、祭りに出る「御輿」・「曳き山」なども対象として取り上げた。こうした、盆踊りや御輿・曳き山を全自治会対象に調査をしたのは初めてのことではないかと思う。その成果は、報告書を参考にしてほしい。調査は、アンケートの回収と集約だけではなく、事務局の献身的な努力を得て、精度も高くなった。しかし、アンケート調査には限界があることも十分承知している。報告書の内容について、疑問の点があればぜひご指摘を願いたい。また、この調査成果を活用して、現地を訪れ実際の民俗芸能を五感で鑑賞してほしい。民俗芸能は、伝承されてきた場所で見ると、演じる者の心や、見る者の心、芸能を育てた環境がよく分かり、理解がより深まるものである。

最後になるが、本報告書は民俗芸能をめぐる課題も指摘している。それは、後継者の育成、道具類等の維持や修復費用、若者の伝承意識の希薄化である。こうした課題の解決には、伝承する側、それを助ける側の意識の変革も必要になる。

一つは、地域づくりの核として活用する視点である。民俗芸能は、古くから神に奉納するとともに演じる者、見る者も楽しむものであった。つまり、民俗芸能は、地域コミュニティの活性化や育成に大きく寄与することができるということである。２００７年２月２５日に開催された「民俗芸能 in たんばフォーラム」では、民俗芸能を復活した団体から、村の人たちの交流が深まり、地域の活性化を図ることができたという心強い声があった。

今一つは、民俗芸能を保存する団体の結束や交流を深めるということである。民俗芸能の保存団体は、村を単位とするものが多く、保存・継承の問題を一組織で抱え込むことが多くなる。こうした課題の解決には、保存団体間の交流による知恵や技術の共有、資金確保の手法の検討などがあげられる。悩みは、共有してこそ力になるのである。

さらに、簡単でないことは十分承知しているが、こうした民俗芸能の伝承を学校教育の中で活用する方法や後継者を外部に広く求めるという大胆な考え方もあろう。

この報告書は、丹波地域の民俗芸能に対する意見をまとめたものである。いわば、民俗芸能に対する地域の声の集約といえる。それだけに、保存団体だけではなく、より多くの方に活用していただき、民俗芸能を含めた丹波地域の「文化の活性化」に寄与できるように願っている。

平成１９年３月

丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査委員会

委員長　　久　下　隆　史

丹波地域民俗芸能保存・継承支援活動調査委員会‥‥文責

委員長　久　下　隆　史　‥‥‥丹波地域における民俗芸能　民俗芸能とは　おわりに
（現在、阪神北教育事務所　所長）

委　　員　大　江　　篤　　‥‥‥丹波地域民俗芸能の現状と課題
（現在、園田学園女子大学　未来デザイン学部　助教授）

西　尾　嘉　美　‥‥‥丹波地域民俗芸能保存・継承活動調査の概要と考察
（現在、三田市教育委員会、御影史学研究会）

久　下　正　史　‥‥‥丹波地域民俗芸能保存・継承活動調査の概要と考察（分布図１～６）
資料編
（現在、神戸大学大学院　文化学研究科　助手）

事務局　(財)兵庫丹波の森協会‥‥はじめに、調査の概要

協　　力　篠山市教育委員会・丹波市教育委員会‥‥指定の民俗芸能

写真提供　西尾　嘉美、藤本　幸男、青垣観光協会、川阪自治会、若林自治会、
篠山市教育委員会、丹波市教育委員会

平成１８年度丹波地域民俗芸能保存・継承支援事業

丹波地域（篠山市・丹波市）民俗芸能調査報告書

～丹波地域民俗芸能の現状と課題～

平成１９年３月

（財）兵庫丹波の森協会　丹波の森公苑

〒６６９－３３０９

兵庫県丹波市柏原町柏原５６００

Http//www.tanba-mori.or.jp

TEL　０７９５－７２－５１７０

FAX　０７９５－７２－０８９９